

飯久保城跡

2003年3月

水見市教育委員会



(1) 飯久保城跡全景（北から）



(2) 飯久保城跡A地点からの眺望（北東方向を望む）

飯久保城跡

2003年3月

水見市教育委員会

序

富山県の西北部に位置し、能登半島の付け根東側にある氷見市は、海の幸、山の幸に恵まれ、定住をはじめた人々の生活の場として、数多くの文化財を生み、そして育んできました。

特に室町時代には、能登と国境を接することもあり、数多くの山城が市内に築かれ、その多くが今もその面影を残し、中世という時代を今に偲ばせております。

これらの貴重な文化財を保存し、そして活用を図るため、氷見市では主要城郭測量等調査事業を始めることになりました。

そのままでいたしまして、国人狩野氏の居城として知られている飯久保城跡の調査を行い、多数の成果を得ることができました。

本書が今後の保存・活用の基礎資料として資するところがあれば幸いです。

なお、調査にあたりましてご協力を賜りました地元をはじめ、関係機関・関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成15年3月

氷見市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、氷見市教育委員会が国庫補助金・県費補助金を得て、平成13・14年度に実施した飯久保城の調査報告書である。
- 2 調査は富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を受けて、氷見市教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は氷見市教育委員会生涯学習課に置いた。担当は下記の通りである。
平成13年度　課長森靜治・係長坂本研資・学芸員廣瀬直樹
平成14年度　課長池田晃・副主幹坂本研資・学芸員廣瀬直樹
- 4 調査は氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員大野究が担当し、廣瀬が補佐した。
- 5 本書の編集・執筆は大野が担当した。
- 6 調査にあたって、以下の機関・個人の方々からご指導・ご協力を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略）。

城飯久保地区・火見城発伸の会・光久寺・氷見市立湖南小学校

中井均（米原町教育委員会）・高岡徹（富山県教育委員会）・西井龍儀（富山考古学会）・宮田進一・越前慶祐・齊藤隆（以上、富山県埋蔵文化財センター）・林昭男（富山大学考古学専攻学生）・久保尚文・鈴木瑞磨・高橋延定（以上、氷見市史編さん室）・横澤信生（越中史壇会）・小堀卓治（氷見市立博物館）・出島勝夫・正保久男・谷内一郎・正保向一・出鶴洋一・飯野信一・谷内伸一・山岸太一（以上、地元）

目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 飯久保城跡の立地と歴史的環境	2
第3章 調査の成果	5
第4章 考察	18
おわりに	26
飯久保城関連年表	27
参考文献	28
付 編 飯久保城関連史料	36(1)
報告書抄録	

図 目 次

第1図 飯久保城跡周辺の遺跡	3
第2図 氷見高校歴史クラブ作成の飯久保城実測図	6
第3図 飯久保城跡平面図	7
第4図 試掘トレンチ配図	10
第5図 調査区平面図	11
第6図 調査区セクション図	12
第7図 遺物実測図(1)	14
第8図 遺物実測図(2)	15
第9図 飯久保光久寺茶庭	17
第10図 十三谷地区における近世の街道	19
第11図 飯久保城とその周辺(1)	22
第12図 飯久保城とその周辺(2)	22
第13図 飯久保城周辺の地名	23
第14図 飯久保城下地割図	23
第15図 飯久保城の虎口空間	25
第16図 七尾城本丸の虎口空間	25
第17図 飯久保城の出入口	25
第18図 七尾城本丸の出入口	25

図 版 目 次

卷首図版	(1)飯久保城跡全景 (2)飯久保城跡A地点からの眺望
図版 1	(1)飯久保城跡遠景 (2)飯久保城跡全景
図版 2	(1)飯久保城跡出入口 (2)飯久保城跡出入口
図版 3	(1)飯久保城跡出入口 (2)Iトレンチと土壘 (3)Iトレンチ全景
図版 4	(1)IIトレンチ全景 (2)IIトレンチ拡張地区 (3)IIIトレンチ全景 (4)IIIトレンチ全景
図版 5	(1)遺物出土状況 (2)遺物出土状況 (3)調査風景 (4)調査風景 (5)調査風景 (6)A地点の石造物 (7)IIトレンチ (8)IIIトレンチ
図版 6	(1)出土遺物その1 (2)出土遺物その2
図版 7	(1)出土遺物その3 (2)出土遺物その4

第1章 調査に至る経緯

富山県の西北部に位置し、能登半島の付け根東側にあたる氷見市は、歴史的にみると越中にありながらも能登の影響を強く受けた地域といえる。これは中世においても例外ではなく、越中・能登両勢力の接点として、軍事的な緊張が絶えずあったと考えられ、市域には南北朝期や戦国期の城郭が、これまでに約50カ所確認されている。

これらの城郭は、規模の大小、記録や伝承の有無にかかわらず、それぞれが中世氷見の歴史を知る上で、貴重な文化財といえる。

しかしながら、市内の丘陵の多くは里山として人々の営みと今も深く結びついており、これら城郭の周辺に開発の手が及ぶことも多い。

そこで氷見市ではこれらのうち主要な城郭について測量等の調査により基礎的な資料を得て、今後の保護・活用に役立てる方針を立て、対象城跡の選定にあたった。

さて、市内の主要な城郭を示すひとつの指針として、近世の絵図に古城跡として記されているものを列挙すると、阿尾城跡・森寺（湯山）城跡・小浦（池田）城跡・荒山城跡それに飯久保城跡の5つの城郭があげられる。

阿尾城跡は富山湾に面した独立丘陵上に築かれた城である。その独特な景観とともに市民に古くから親しまれており、昭和40年に富山県指定史跡になっている。戦国期には屋代氏・菊池氏が居城し、城下町も形成された。耕作等による土地の変更によって明確な縄張りは不明であるが、試掘調査によって15世紀後半から16世紀代を中心とした遺物が出土しており、現在は公園として整備されている。

森寺（湯山）城跡は、阿尾川中流左岸の丘陵上に築かれた山城であり、その規模は南北約1.1km、東西約0.4kmに及ぶ。戦国期に能登畠山氏によって築かれたと推定され、その後上杉謙信・佐々成政の支城となった。中心地区には県内中世城郭では珍しい石垣が築かれている。昭和48年に氷見市指定史跡となり、森林公園として整備されているが、近年の試掘調査によって新たな空堀や戦国期の遺物が出土している。現在草刈りやガイド等を行うボランティアグループが地元に生まれ、地域に密着した城跡として活用されている。

小浦（池田）城跡は上庄川中流左岸の丘陵上に築かれた山城である。戦国期に三善（小浦）氏が居城した。城下と推定される地名も残るが、詳細は不明である。城跡の本格的な調査は行われていないが、現在地元爱好者会によって整備されている。

荒山城跡は、石川県鹿島町と氷見市にまたがる山城である。石動山の出城として築かれたと推定されるが、戦国末期には文字通り境目の城として重要な位置を占めた。現在主要部である石川県域が鹿島町指定史跡となり、整備されている。

これらの城郭と比べると、飯久保城跡は古くから存在は知られているものの、調査・整備の面でやや遅れをとっていたといえよう。

折しも能越自動車道の計画ルートが発表され、飯久保城跡の所在する丘陵を道路が横断することが判明し、城跡との関連が重要な条件として浮上した。

その一方で、上記のような整備・活用例が市内で増えてきたことを受けて、飯久保地区でも地域の貴重な文化財として城を見直そうという気運が盛り上がった。

そこで主要城郭測量等調査事業の第一として、飯久保城跡の調査を行うことになった。

第2章 飯久保城跡の立地と歴史的環境

氷見市は、富山県の西北部に位置し、地理的には能登半島の付け根東側にある。昭和27年の市制施行から昭和29年までに、太田村を除く旧氷見郡1町17村が合併し、現在に至っている。面積は約230m²、人口は約5万8千人である。

市域は、南・西・北の三方が標高200～500mの丘陵に取り囲まれ、東側は約20kmの海岸線をもって富山湾に面している。丘陵は新第三紀と第四紀層から成り、山間部では地滑りが多く発生する。市北半部は、上庄川・余川川・阿尾川・宇波川・下田川といった小河川とその支流から成る谷地形であり、上庄川流域以外ではまとまった平野が少ない。市南半部は、主として布勢水海ふせのみずかいが堆積してできた平野と、その砂嘴として発達した砂丘から成る。

飯久保城跡は氷見市南部の仏生寺川右岸、石川県と氷見市・福岡町の境界にある大釜山(501.7m)から東に張り出した仏生寺・神代丘陵の一角に位置する。

仏生寺川の下流にはかつて布勢水海と呼ばれた潟湖が広がっていた。なお後述の第10図に示したのは延宝年間(1673～1681)以前の潮水線であり、中世においてもほぼ同様の大きさであったと考えられる。

飯久保地区は仏生寺川をはさんで北と南の二つの集落に分かれている。北側の集落は寺坂久保と呼ばれ、ここには真宗大谷派光久寺と寺内長榮寺がある。光久寺には加賀藩御用達園師能登の制作と伝えられる茶庭があり、富山県指定名勝となっている。一方南側の集落は飯久保城の麓にあることから、城飯久保又は城ノ下と呼ばれている。「三州地理志稿」など近世の史料では城飯久保を飯久保村の枝村としているが、明治22年の「国土行政区観察」では両集落並列となっている。

城跡は城飯久保集落南側の丘陵上に位置し、標高は50～75mである。また城下集落の標高は約10mである。

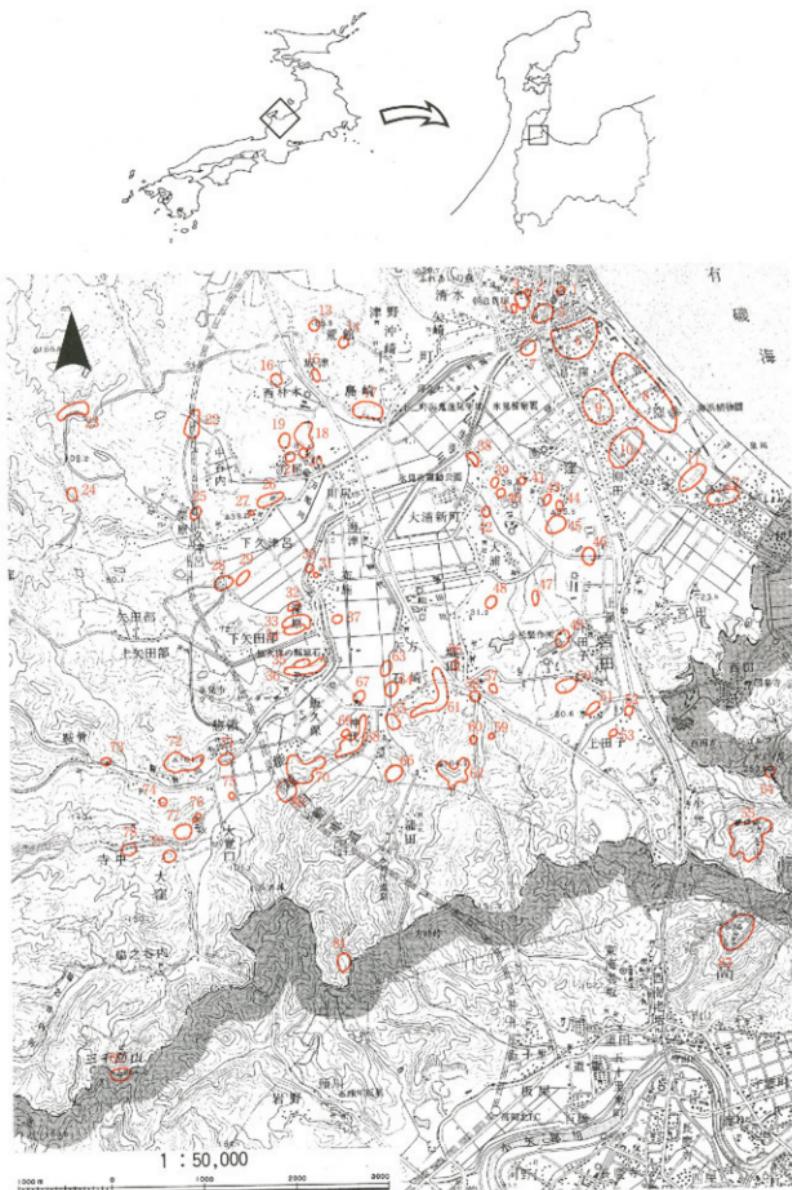
次に、城跡周辺の遺跡について、布勢水海南側を中心に概観しておきたい。

縄文時代では、神代羽連遺跡で石器が採集されているが、他にあまり資料がなく、詳細は不明である。弥生時代では、同じく神代羽連遺跡と矢方一丁目遺跡で、弥生時代終末期の遺物が出土しており、この時期から布勢水海南側の低地に生産基盤をおいた集落が営まれ始めたと考えられる。なお、神代羽連遺跡ではわずかであるが、弥生時代中期の資料もある。

古墳時代では、神代羽連遺跡において前期初めの資料があり、中期になると神代羽連遺跡に矢方一丁目遺跡・惣領遺跡・布施畠直遺跡が加わり、布施畠直遺跡を除いて後期まで存続する。一方古墳では前期から後期まで長期間造営された光西寺山古墳群をはじめとして、中期と推定される惣領コツデラ古墳群、後期と推定される惣領古墳群・寺飯久保古墳群などがある。

古代では神代羽連遺跡・飯久保ナガモン遺跡・飯久保山ノ下遺跡などがあるが、集落の主体は東側の堀田地区周辺に移っていた可能性がある。

中世では本城の他、神代城跡・惣領皆跡・惣領コツデラ城跡・御林山城跡(鞍骨山城跡)などの城郭が確認されている。



第1図 飯久保城跡周辺の遺跡

1 伊勢玉神社中世墓（中世）	43 園長堤遺跡（古代）
2 朝日十字路遺跡（中世）	44 柳田沖宮遺跡（古代）
3 朝日貝塚（縄文～中世）	45 柳田向山遺跡（縄文）
4 朝日渴山古墳群（古墳）	46 柳田布尾山古墳（古墳）
5 岩上遺跡（縄文～中世）	47 大浦深素遺跡（古代）
6 雀北遺跡（古代・中世）	48 堀田サカイ遺跡（古代）
7 十二町潟排水機場遺跡（縄文）	49 四十塚遺跡（縄文）
8 松田江北遺跡（中世）	50 田子遺跡（縄文）
9 真シムラ遺跡（中世）	51 上田子遺跡（中世）
10 柳田遺跡（弥生・古墳）	52 上田子諏訪遺跡（中世）
11 柳田南遺跡（古代）	53 上田子古墳群（古墳）
12 烏尾遺跡（中世）	54 大師ヶ岳遺跡（中世）
13 荒館A遺跡（中世）	55 小竹遺跡（中世）
14 荒館ノモギ遺跡（中世）	56 堀田竹端遺跡（古代）
15 坂津横穴群（古墳）	57 堀田ナンマイダ松古墳群（古墳）
16 西朴木古墳群（古墳）	58 堀田大久前遺跡（古代・中世）
17 烏崎城跡（中世）	59 堀田館ノ山古墳（古墳）
18 万尾遺跡（弥生・古墳）	60 堀田ワタリウエ遺跡（古代・中世）
19 万尾城跡（中世）	61 堀田ニキ塚山古墳群（古墳）
20 万尾古墳（中世）	62 堀田城跡（中世）
21 万尾B遺跡（古代）	63 神代羽連遺跡（弥生・古墳）
22 中谷内遺跡（中世）	64 石崎遺跡（古代・中世）
23 高松城跡（中世）	65 矢方一丁目遺跡（弥生・古墳）
24 栗原ミナト遺跡（古墳）	66 神代城跡（中世）
25 栗原A遺跡（古代）	67 飯久保ナガモン遺跡（古代）
26 久津呂城跡（中世）	68 光西寺山古墳群（古墳）
27 下久津呂古墳（古墳）	69 飯久保山ノ下遺跡（古代）
28 上久津呂B遺跡（古代）	70 飯久保城跡（中世）
29 上久津呂A遺跡（古代）	71 慈領遺跡（古墳・古代）
30 布施八ヶ田遺跡（縄文・古代）	72 慈領砦跡（中世）
31 布施円山古墳（古墳）	73 鞍骨岩屋遺跡（中世）
32 深原前田遺跡（古代・中世）	74 鞍骨オヤノヤチ遺跡（古代）
33 深原古墳群（古墳）	75 慈領古墳群（古墳）
34 深原打越遺跡（古代）	76 慈領コツアラ古墳群（古墳）
35 飯久保後山遺跡（縄文・近世）	77 慈領コツアラ城跡（中世）
36 寺飯久保古墳群（古墳）	78 寺中向遺跡（中世）
37 布施畠直遺跡（古墳）	79 寺中竹端城跡（中世）
38 大浦城跡（中世）	80 正保寺遺跡（中世）
39 大浦三蔵古墳群（古墳）	81 神代テラヤシキ遺跡（中世）
40 大浦三乘寺遺跡（縄文）	82 二ツ城跡（中世）
41 園カンゾ衛窓跡（古墳）	83 守山城跡（中世）
42 大浦遺跡（弥生）	

第3章 調査の成果

調査前の知見

飯久保城は近世の絵図に記された古城跡の一つであり、古くからその存在が知られてきた。飯久保城に関する史料については付章にまとめたが、近世の史料には本丸の規模が東西三十三～三十五間、南北十～十三間とされており、また途中に段々が多数あると記されている。また城は廃城後、柴山になっていたようである。

そして城の具体的な構造については、昭和35年度に富山県立氷見高等学校歴史クラブが主要部分の実測を行っている〔氷見高校歴史クラブ1966〕(第2図)。この実測図により、「折り木戸」と呼ばれる樹形、「大門」と呼ばれる土橋部分、「矢場」と呼ばれる平坦面にある井戸(湧水)のほか、主郭や土塁の規模・形が初めて示された。

その後は高岡徹氏や佐伯哲也氏によって、略測による縄張図が発表されている〔高岡1990、氷見市教委2001、佐伯1991・2001〕。

これらの研究により、城の構造がかなり明らかになるとともに、城主とされる狩野氏についても、地域の中世史の中に位置づけられるようになってきた。

今回の調査は、城跡のより正確な範囲・内容を把握し、今後の保存・活用に役立てることを目的とし、測量調査に主眼をおき、補足的に縄張りの確認や遺構の残存状況確認のため、発掘調査を行ったものである。

測量調査の成果

測量調査は平成13・14年度の二カ年に分けて、城全体の平面図を作成した。作成は業者委託とし、原図の縮尺は1/500、等高線間隔は1mである。

各年度とも、業者の測量作業終了後、高岡徹氏、市教委、業者の三者立ち会いのもと、現地で校正作業を行い、正確を期した。

測量作業を通して、基本的にはこれまでに公表された縄張図に示された郭や防御施設などが認められ、それらの位置や規模をより正確に図化することができたが、主郭南側下に4条の堅堀が確認されるなど、新しい知見も加えることができた。

城跡は、城坂久保集落南側に接する丘陵上、標高75m地点を最高所として周囲に広がり、主要部の範囲は南北約300m、東西約200mになる。

以下、主要な遺構について簡単に触れておく(第3図)。

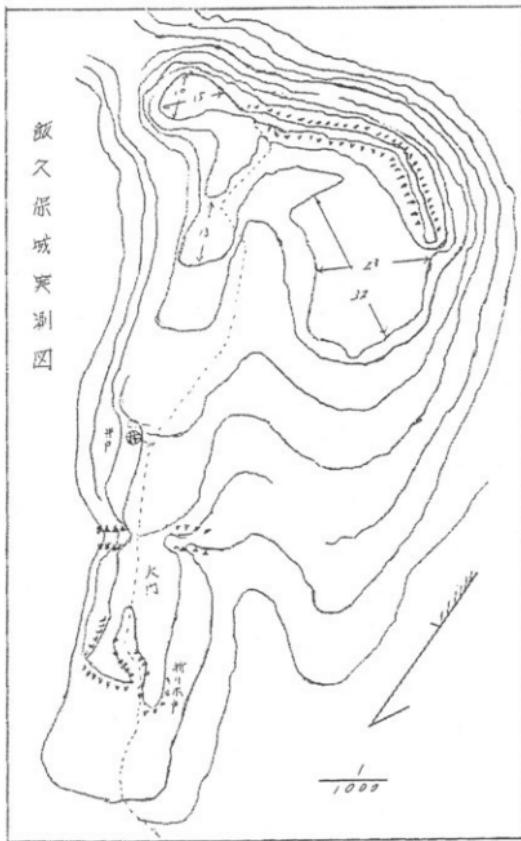
最高所Aは10m四方ほどの平坦面となっており、ここからは北東方向に十三地区の平野が見渡され、さらには市街地・富山湾・虹が島まで見通すことができる。ここは物見台あるいは櫓状の施設として使用されていたと思われる。なお、現在このA地点には中世の石造物が安置されている。

A地点のすぐ北側、標高67m付近に広がる平坦面Bが主郭であろう。東西約70m、南北約40mの「凹」の字状を呈し、本城跡で最も広い平坦面である。南側は、A地点から西へ続く土塁状の遺構によって防護され、その長さは60m、高さは5m以上になる。

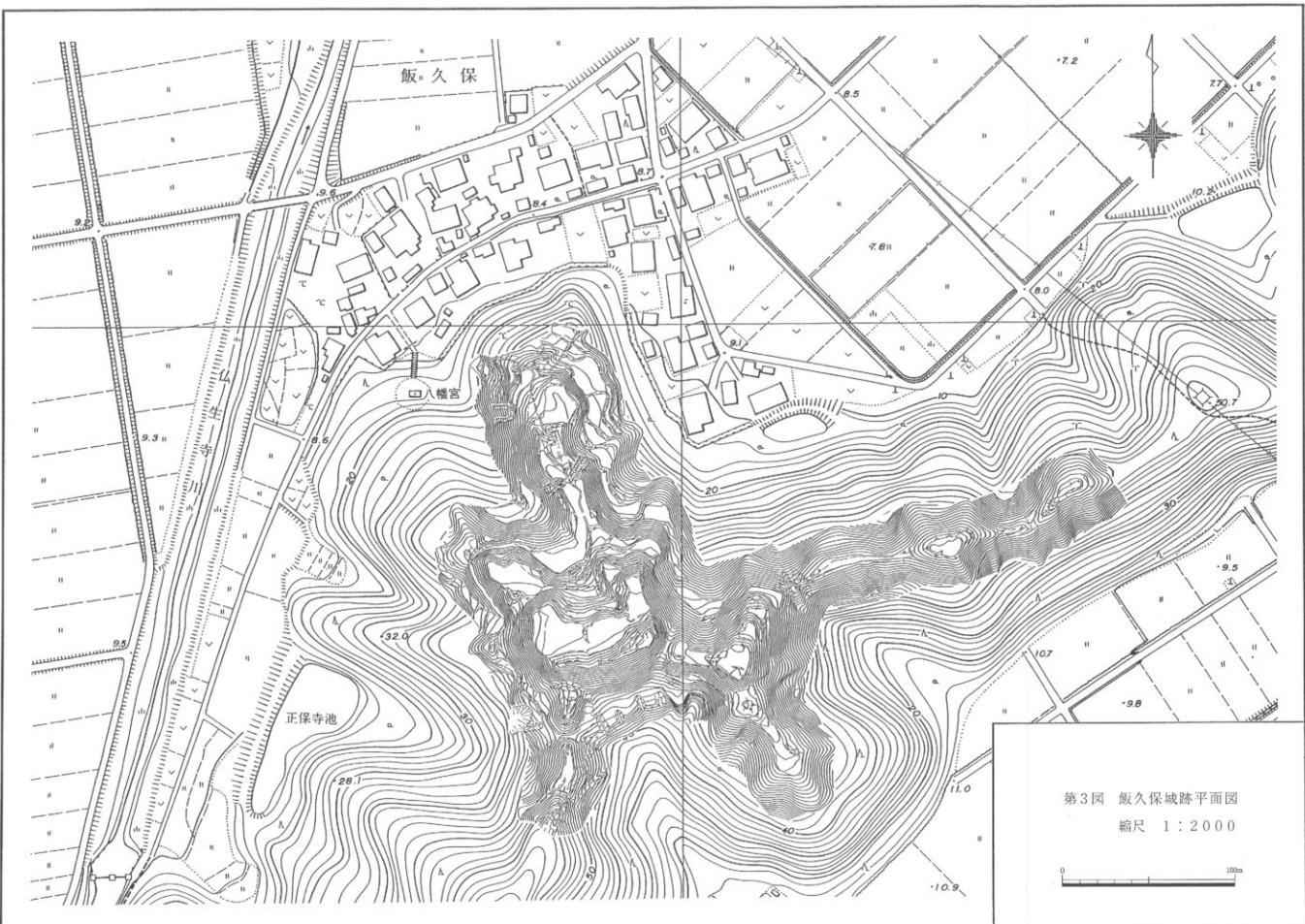
B郭の北西一段下には30×20mの平坦面Cがあり、ここはB郭の副郭ともいえる場所である。C郭の北西下は堀切で防護されている。

B郭中央の北側は、数段の狭い平坦面を経てD郭が配されている。なおD郭南のB郭裾には湧水があ

飯久保城実測図



第2図 氷見高校歴史クラブ作成の飯久保城実測図
([氷見高校歴史クラブ1961] から)



る。またD郭東側の斜面にも数段の平坦面が設けられている。

D郭の北側には虎口空間Eが配されている。E地点は北側が土壘による樹形、南側が堅堀による平入りの出入口となっている。虎口空間Eの広さは約20×15mである。E地点は南から北に向かって緩く傾斜している。

D・E地区東側には一段低く帯郭状の平坦面が設けられている。

A地点東側は、尾根を遮断する大規模な堀切を経て、F郭に至る。F郭は標高71mで20m四方の規模である。北側は数段の平坦面を経て、二重の堀切で防御される。堀切の東側は目立った防御施設はないが、G地点が15m四方に削平されており、出丸状になっている。またF郭の南側も切岸を経て平坦面がある。

B郭南西の尾根には三重の堀切が設けられ、B郭南側の緩斜面には4条の堅堀がある。

なお、表面観察では石積・石垣などは確認されなかった。

以上のように、飯久保城は地形を巧みに利用して築かれた山城であるが、特に虎口空間が特徴的な城跡といえる。

発掘調査の成果

測量調査の補足として、平成13年度はIトレンチを、平成14年度はII・IIIトレンチを設定し、発掘調査を行った。

調査参加者は次のとおりである。

調査員：大野究（氷見市教育委員会生涯学習課主任学芸員）

調査補助員：的場茂晃（富山大学大学院考古学専攻生）

：細田隆博（富山大学考古学専攻学生）

作業員：沢井正雄、沢井とき、中村かず子、坂田かずい、戸田敏子、向春子、山下金次郎、柿本せつ子、谷内敏子、南幸子、中谷正一、境信男、井川記仔、嵐千恵子（以上、氷見市シルバー人材センター）

遺物整理：三矢恵京、日南静

Iトレンチ（第4・6図）

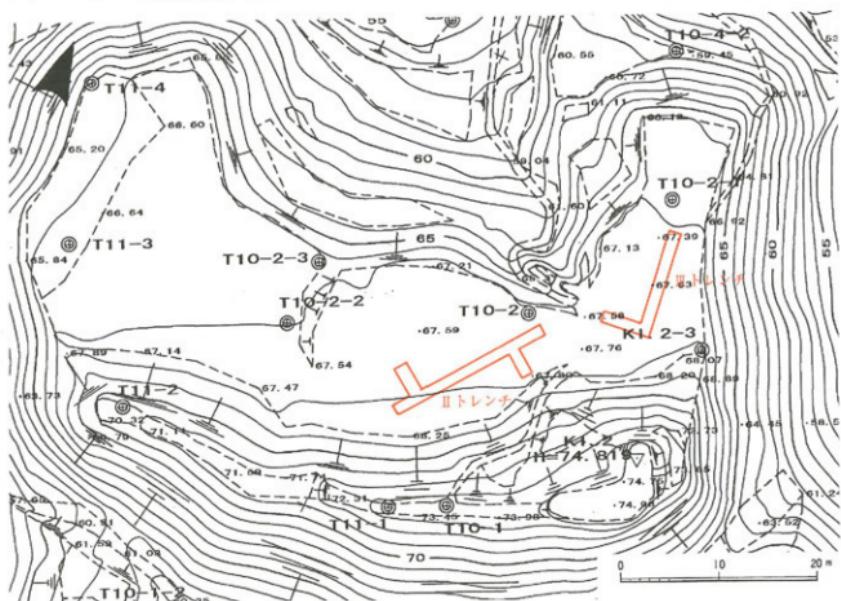
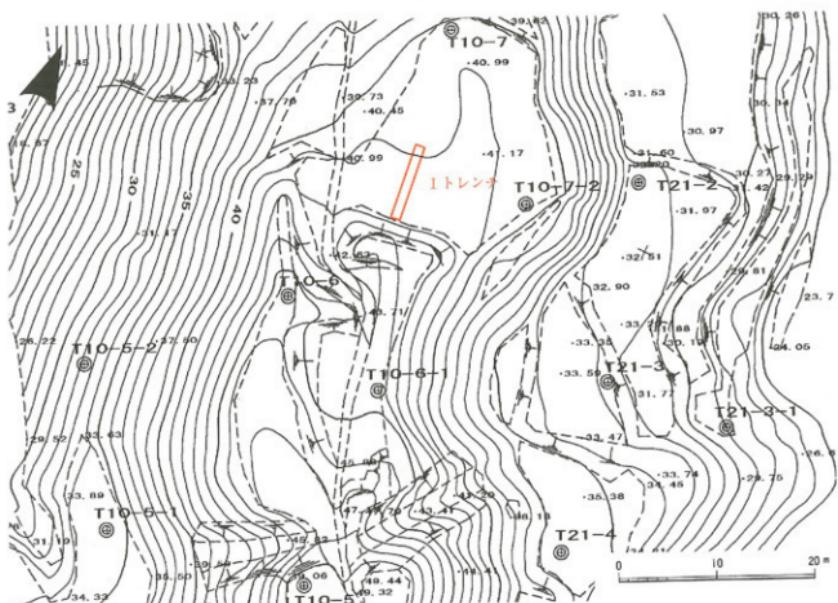
虎口空間出入口土壘の前面について、空堀等の遺構の有無を確認するために設定した1×7mのトレンチである。

調査の結果、表土の下は深さ20~30cmで地山となり、遺構・遺物はともに発見されなかった。

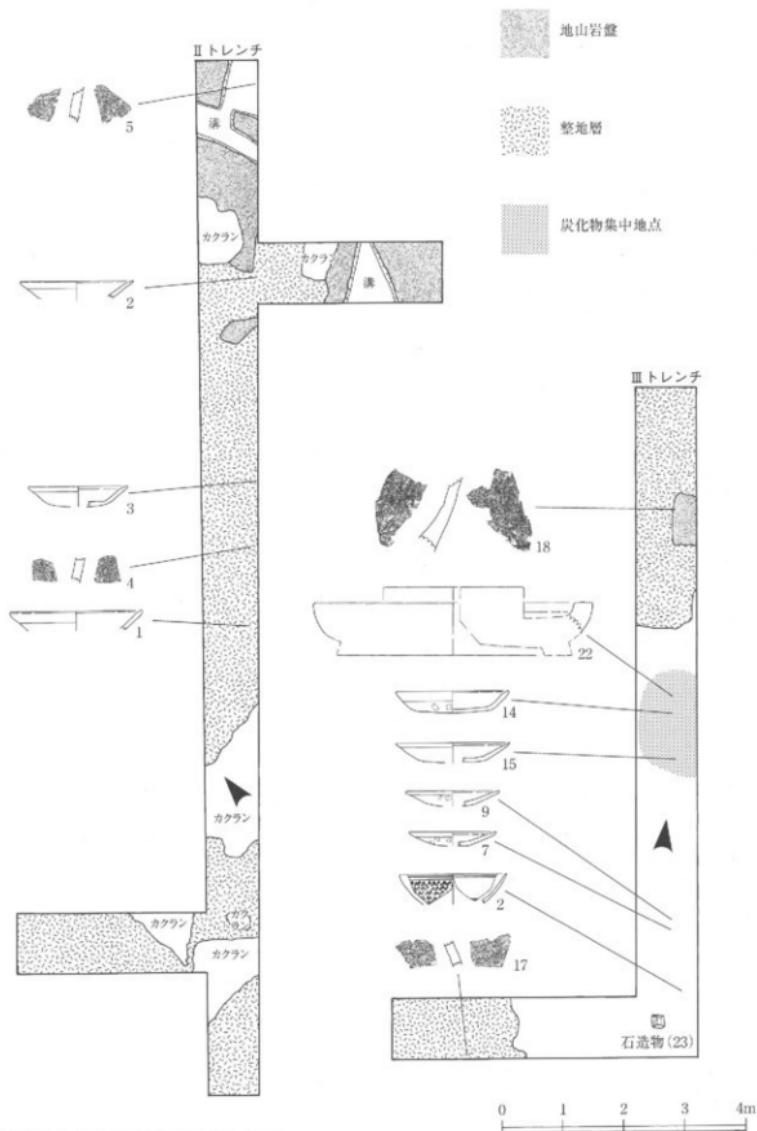
IIトレンチ（第4~7図）

主郭と考えられる平坦面B中央部の遺構残存状況を確認するために設定した1×17mのトレンチであり、一部北と南にそれぞれ拡張した。

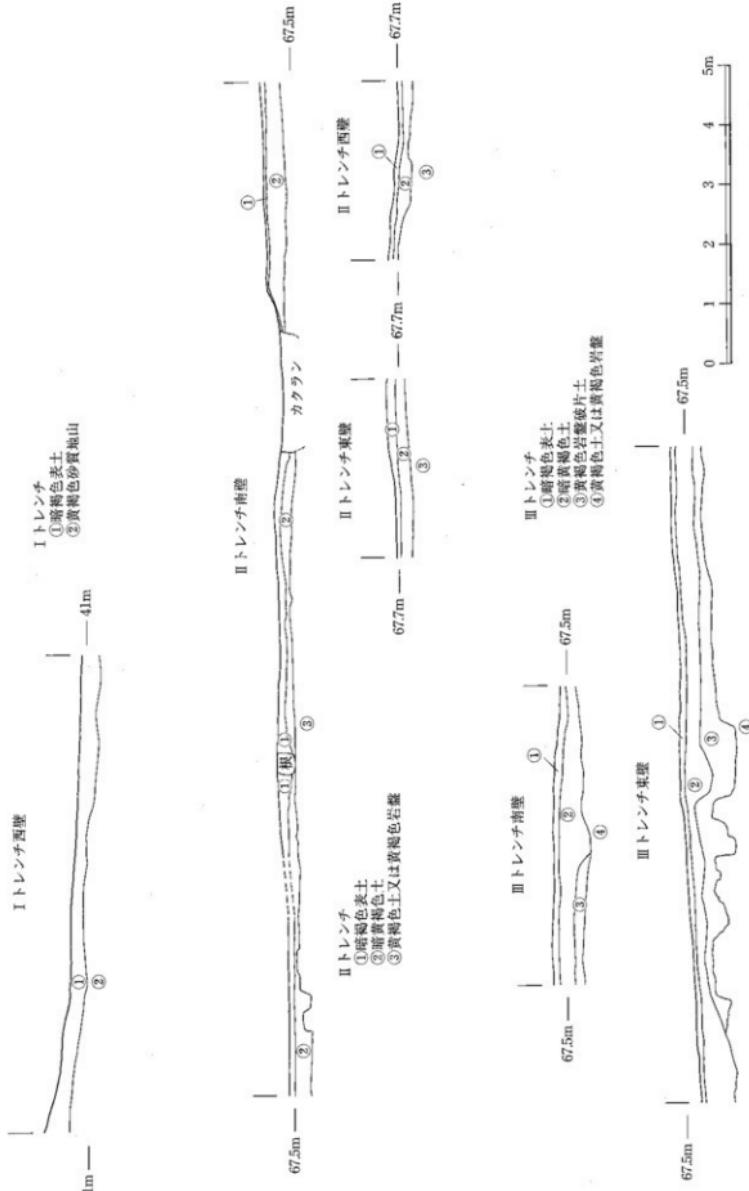
トレンチの北東側では、地山岩盤が表土を除去した段階で検出された。この岩盤を彫り込んだ溝状の遺構が確認されたが、城とともにうものなのか、耕作などによるものかは不明である。ただ、トレンチ北端において南北に走る幅35cm、深さ15cmの溝状遺構は、郭背後の土壘と直交する向きであり、何らかの区画溝の可能性がある。



第4図 試掘トレンチ配置図 (1/500)



第5図 調査区平面図 (1/80)



第6図 調査区セクション図 (1/80)

一方、トレンチの中央から南西にかけては、風倒木などによる攪乱があるものの、地山の泥岩質岩盤を碎いて敷き詰めたような水平な面が検出された。このような面は森寺城跡二の丸の調査でも確認されており〔水見市教委2000〕、城に関連する整地面と推定される。

遺物は中世土師器と越前が出土し、このうち5点を図示した。

1～3は中世土師器皿である。1は口径16.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は8%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、内外面ともにぶい橙色である。2は口径14.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は7%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、内外面ともにぶい橙色である。口縁端部に強い横ナデを施す。3は口径12.2cm、器高2.5cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は17%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。見込み圈線が明瞭に施されている。

4・5は越前の甕または壺の破片である。4は内外面とも灰褐色、5は外面が褐色、内面が灰褐色である。

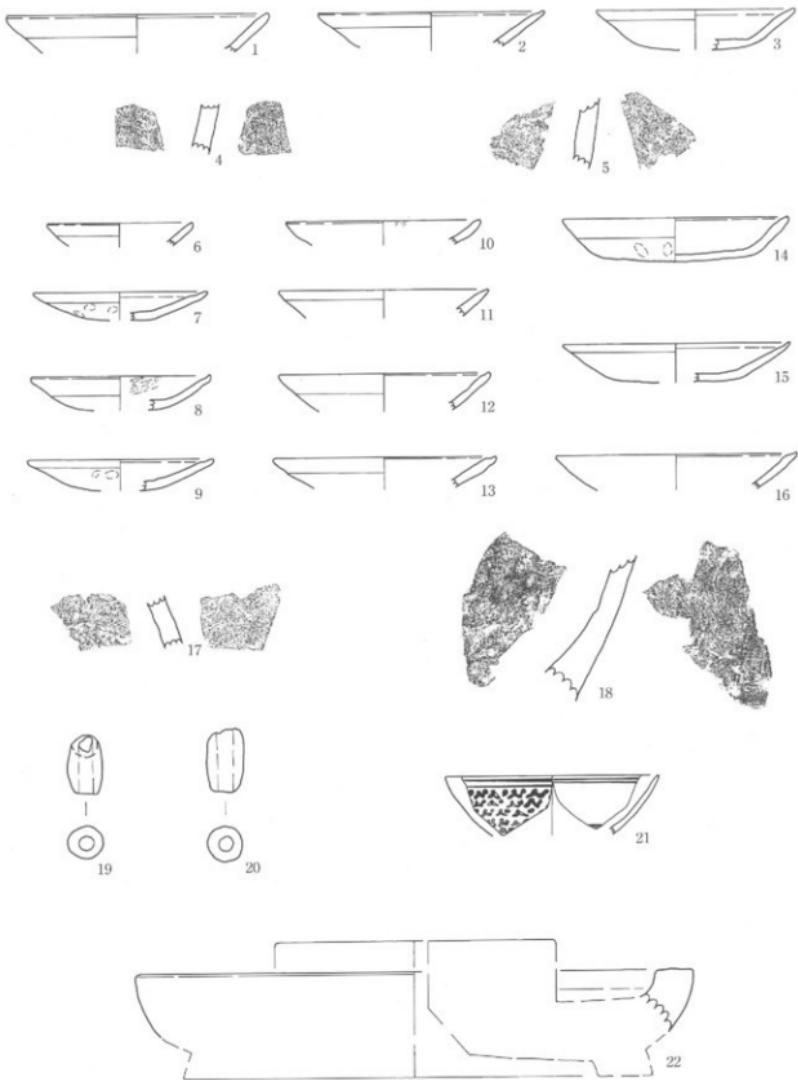
Ⅲ トレンチ（第4～8図）

主郭と考えられる平坦面B東側の遺構残存状況を確認するために設定した1×11mのトレンチであり、西側に拡張区を設けた。

Ⅱトレンチで確認したと同様の整地面は、トレンチの北端と西端で確認された。これに対してトレンチの中央部はかなり攪乱を受けており、特に中央北よりの部分で顕著であり、この部分では炭化物が集中していた。

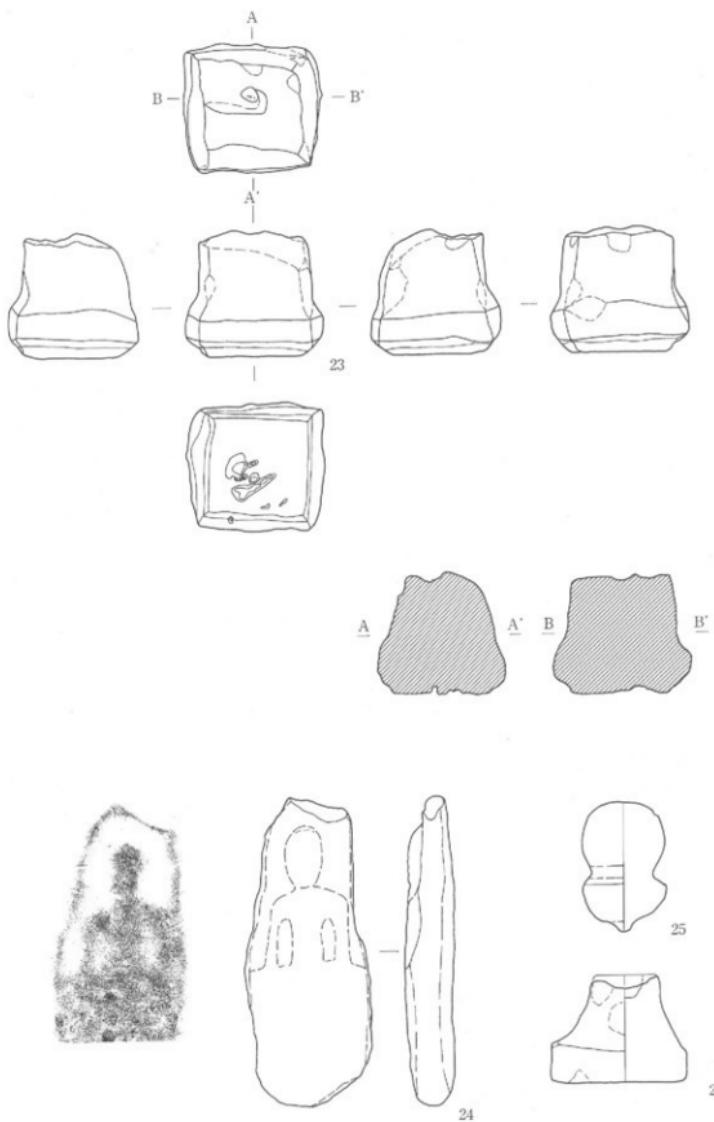
遺物は中世土師器・越前・染付・茶臼・土錘・石造物・近世磁器・近現代瓦・炭片などがあり、このうち中世の資料18点を図示した。

6～16は中世土師器である。6は口径9.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は17%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、内外面ともにぶい黄橙色である。7は口径10.8cm、器高1.8cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は7%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい橙色である。8は口径11.0cm、器高2.1cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は12%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい橙色である。内面調整は「の」字にナデ抜く。口縁に油煙痕がある。9は口径11.5cm、器高2.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は32%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい橙色である。口縁端部はやや強く横ナデを施す。10は口径12.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は3%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。口縁端部に油煙痕がある。11は口径13.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は4%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい橙色である。12は口径13.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は12%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は内外面とも浅黄橙色である。口縁端部に強い横ナデを施す。13は口径13.7cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は12%である。胎土は密である。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい黄橙色である。口縁端部は強く横ナデする。14は口径13.8cm、器高2.7cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は22%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は外面がぶい橙色、内面がぶい黄橙色である。口縁端部をやや強く横ナデする。15は口径14.0cm、器高2.9cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は15%である。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は内外面ともにぶい橙色である。口縁端部をやや引き出す。16は口径15.0cmの手づくね皿であり、口縁部残存率は8%である。胎土は密であり、海



第7図 遺物実測図(1) 1 / 3

0 15cm



第8図 遺物実測図(2) 1 / 8

0 25cm

縫骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は内外面とも浅黄橙色である。口縁端部をやや引き出す。

17・18は越前の甕または壺の破片である。17は内面が灰黄褐色、外面が黄灰色である。18は内面が灰色、外面が灰黄褐色である。

19・20は土鍤である。19は一部を欠損する。残存長3.7cm、最大径2.2cm、孔径0.9cmである。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色である。外面は縱方向にヘラケズリ調整を施す。重量は12.5gである。20は全長3.9cm、最大径2.3cm、孔径0.95cmである。胎土は密であり、海綿骨片を微量に含む。焼成は良好であり、色調は橙色である。重量は16.5gである。

21は染付碗であり、口径は13.3cm、口縁部残存率は27%である。外面に沢瀉風の文様を施す。根来寺跡出土資料に同様の文様例がある〔上山1982〕。

22は茶臼下臼のつくりつけの受け皿破片であり、直径は34.0cmである。石材は砂岩である。色調はにぶい黄橙色であり、火を受けた痕跡がある。

23は中世の石造物とみられる。最大幅約22cm四方、高さ約20cmである。一見五輪塔火輪に似るが、底面には約16cm四方の段を一段造り出しており、火輪とは別の部材と思われる。石材は軟質の粗粒砂岩であり、手で触れるだけで表面の粒が剥落する。底部に穿孔具の穿孔痕跡があることから、海岸部で得られた石材と考えられる。底部に比べて上部の造りが曖昧であり、これは風雨にさらされたための剥落によるものなのか、もしくはもともと未製品であったのか、判断がつかない。現状からみれば、宝塔の笠に近い形状であり、県内では井口村特明宮の石塔群のなかに類例がある〔井口村1992〕。

次にⅡ・Ⅲトレンチ出土の遺物の時期について検討する。土師器皿のうち、8・12・13・14・16は口縁端部をつまみ上げるタイプであり、15は口縁端部が尖るタイプのものである。宮田進一氏の編年では、前者は16世紀中頃から後半のもの、後者は16世紀末頃のものである。21の染付碗は小野正敏氏の編年では染付碗C群にあたり、15世紀後半から16世紀中頃のものである。これらの検討から、今回出土した遺物は16世紀後半を主体とした時期のものと考えたい。

これらの遺物は、主郭と考えられる平坦面Bから出土した資料であり、少なくとも城の最終段階の様相を示す資料と考えられよう。

A地区に現存する石造物について

城跡最高所に位置するA地区には、現在中世の石造物が安置されており、今回その実測調査もあわせて行った。

24は一石一尊仏である。高さ50.5cm、最大幅21.0cm、厚さ8.0cmであり、石材は微粒砂岩である。最上部を一部欠損する。正面に上半身を内に刻出している。下半身と手の部分は省略されている。

25は五輪塔空風輪である。高さ21cm、幅14cmであり、欠首は甘く、空輪頂部は尖らない。石材は微粒砂岩である。

26は五輪塔火輪である。頂部を欠くが、高さ18cm、幅22cmである。軒下端はほぼ水平であり、上端はやや反る。石材は微粒砂岩である。

これらの石造物は風化しやすい石材ではあるが、市内の発掘調査例である叢山薬師中世墓（15世紀）や臨方谷内出土中世墓（五輪塔は14世紀中頃～15世紀前半）の資料と比較すると形態が退化しており、15世紀後半に下るものと考えられる〔氷見市教委1985・2000〕。

23の石造物との関連は不明であるが、24～26の石造物は今回の発掘調査で出土した遺物の年代よりさ

かのほる時期のものといえる。A地区は城内最高所であり、物見台や櫓状の施設として利用されたと考えられ、城が存続した時期にこれらの石造物がこの場所にあったとは考えにくい。おそらく後世にこの場所へ移されたのであろう。飯久保城南側の丘陵続きには正保寺跡と呼ばれる寺院伝承地があり、その丘陵裾には中世石造物が集積されている。またその周囲の丘陵にも現在石造物が点々と存在する。A地区の石造物はこうした城近辺のものが移されたのではないだろうか。なお、城跡のうちA地区周辺は、現在光久寺所有の土地である。



第9図 飯久保光久寺茶庭（昭和40年頃撮影）

第4章 考察

ここでは測量調査・発掘調査、さらには文献史料や地籍図などの情報を加えて、飯久保城とその城下、さらには城主とされる狩野氏について考察を加えたい。

第10図は飯久保城周辺における近世の街道と布勢水海の範囲を示したものである。ベースとした地図は昭和23年測量のものであり、布勢水海は近世前期、延宝年間（1673～1681）以前の範囲である。街道は近世の絵図や近代の地籍図などを参照して示した。これらの街道や水海の範囲は、戦国期においても概ね同じ状況であったものと考えたい。

飯久保城は十三谷平野の最奥部に位置しているが、その立地は仏生寺川→布勢水海→漆川の水運を通して富山湾に開けた場所であった。また平野の南半部は、矢方集落周辺に条里制とみられる地割があるよう ([中山1956])、古代以降開発された農業生産力の高い場所であった。一方、平野奥からは鮎を越えて小矢部川左岸地域と通じる街道が幾筋も通り、射水・砺波地域とも連絡が容易な立地といえる。

飯久保城が所在する十三谷南西部は、中世には南条保と呼ばれた。その初出は文明9年（1477）に室町幕府奉行人矢野種倫が、南条保内針江村を土肥十郎に売却した記事である（付編史料1）。針江村の場所は不明であるが、見島清文氏は矢方地区西側の布施地区と神代地区の接するあたりに「ハレ」の小字があることから、この付近と推定している^{注1}〔見島1962〕。その他、南条保として久津呂（付編史料10）、鞍骨（付編史料8）の地名がみえることから、中世南条保の範囲は久津呂・矢方から奥の十三谷地域と推定される。

次に飯久保城周辺の街道に目を移すと、城下の北側には東西に惣領と神代を結ぶ街道が通っていた。現在もある城下からまっすぐ北へ向かい城山橋を渡る道は近世ではなく、城下から寺飯久保へ行く道は、城下をいったん神代の方へ向かい、途中からゆるく北へ分岐するルートであったと考えられる。

第14図は飯久保城下の地割図である。飯久保城と城下のすぐ西側には仏生寺川が北流しており、これが自然の防御となっている。惣領方面からは鍛冶屋橋を渡って城下に入るが、かつて橋は現在の場所よりも約80m下流にあり、東側の橋詰は鍛冶屋町と呼ばれていた。城下には屋敷地の比較的広い地割がみられ、その周囲には水田が広がっている。なお、水田には浮橋・舟中・深田などの地名があり、地元にはこうした湿田が城を守る上での自然の防御となっていたという伝承がある。

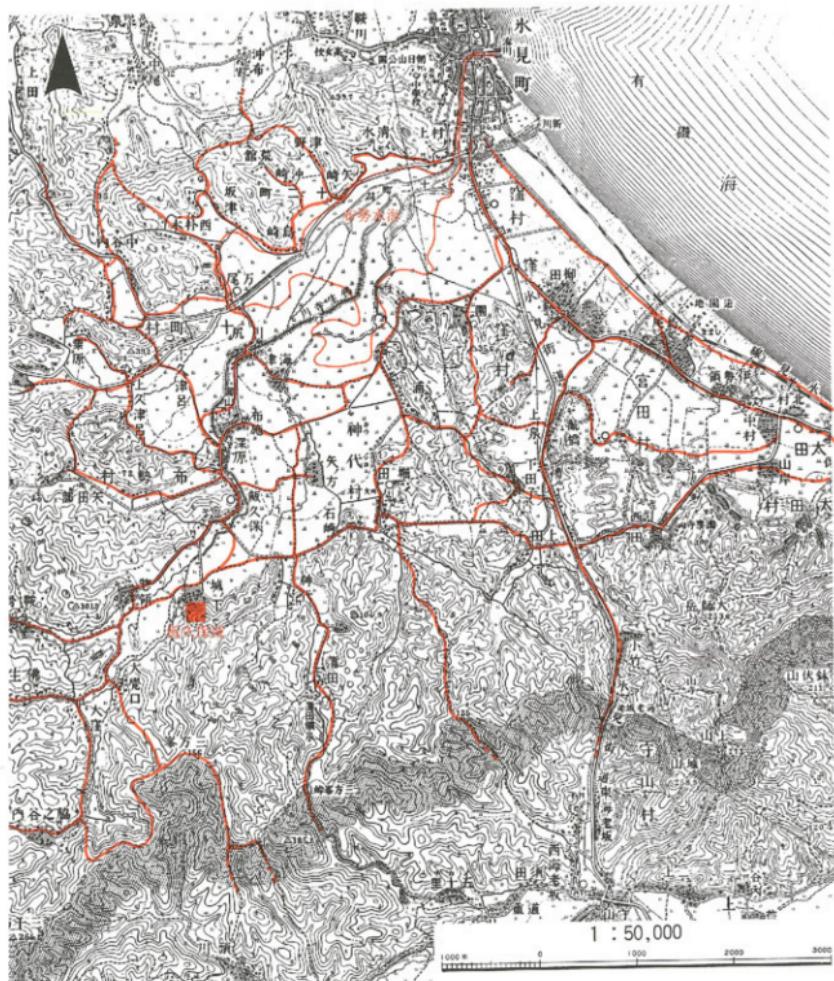
発掘調査は対象地区や面積が限られたため、明確な遺構を確認することはできなかった。しかし主郭部で確認した地山岩盤が細かく打ち碎かれた水平な層は整地層と考えられる。今後面的に調査を行えば、建物などの遺構が検出できるであろう。またIIトレーナーで検出した岩盤に刻まれた溝が城に伴うものであるのであれば、主郭の中がいくつかの部分に区画されて使用されていた可能性が考えられよう。一方、遺物はわずかであるが、土師器に加えて染付や茶白などがあり、城内での生活をしのばせる資料を得ることができた。

さて、測量調査では飯久保城の縄張りを正確に記録することができたが、飯久保城で最も特徴的な部分は、出入口の虎口空間であるといえる。これは第17図に示したように、土壘による樹形の出入口を左右と二つ折れて入り、虎口空間を抜けて、左右二つの堅堀による平入りの土橋を渡って城内へ入るものである。

こうしたタイプの出入口は、織豊系城郭の中で発達した一形態と考えられるが〔千田2000〕、越中・能登・加賀・越前・若狭といった北陸の城郭の中で、飯久保城と同じ形態の出入口をもつものとしては七尾城（石川県七尾市）があげられる。

七尾城は能登畠山氏が領国支配の拠点として戦国期に築いた山城である。標高約300mに築かれた本丸

- ・ベースの地図は昭和23年測量のもの。
- ・近世の街道は、絵図・地籍図などを元に示したが、一部推定した部分がある。また、鈴木瑞麻氏の研究成果〔水見市教育委1992・2000C〕を参照した。
- ・布勢水海の範囲は近世前期の延宝年間(1673~1681)以前のものである。平成14年12月1日開催の水見市制50周年記念フォーラム「水見の歴史と文化を考える—布勢水海から十二町潟へ—」の資料を参照した。
- ・布勢水海の吐川のひとつである新川は、明治元~2年に人工的に掘削された水路である。



第10図 十三谷地区における近世の街道

を中心に、その範囲は1.0×1.8kmに及ぶ。さらに近年は城下の調査も実施されており〔七尾市教委1992・1996〕、戦国期の城郭とその城下が良好に遺存する貴重な例として注目されている遺跡である。畠山氏滅亡後は上杉謙信の支城となるが、謙信死後は織田方の支城となり、天正9年（1581）に前田利家が入城した。

この広大な七尾城のうち、飯久保城と同様の出入口がある場所は、本丸西側の部分である。第18図に示したように、土壘による外輪形を左→右と二つ折れて入り、虎口空間を抜けて、土壘による平入りの出入口を通って本丸に入るものである。

七尾城の場合は石垣を伴う土壘、飯久保城の場合は石垣をもたない土壘と堅堀という違いはあるものの、出入口の形態とすれば両者は同じタイプのものといえよう。さらに両者の虎口空間の広さは、どちらも長さ約20m、幅約15mとほぼ同一であり、両者のプランはかなり類似するものである。^{註2}

七尾城本丸の出入口は、天正9年以降に前田利家によって改修されたと考えられているが〔七尾市教委2002〕、飯久保城の出入口もほぼ時を同じくして織田方の勢力によって改修されたのではないだろうか。なお、飯久保城の出土遺物の時期は16世紀後半主体であり、この改修の時期と矛盾しない。

次に以下では改修の背景について史料から検討を加えたい。

飯久保城の城主として知られるのが狩野氏であるが、その出自は不明である。これまでの研究では、加賀を本拠とした室町幕府奉公衆の流れと推定されている〔久保1983・富山県1984〕。加賀狩野氏は親応3年（1352）に越中へ出陣しており、この時の戦いは氷見地域を中心としたものであった〔高岡1990〕。こうしたことから、その一族が氷見に所領を得たのではないかと推定されているのであるが、両者を直接結びつける史料はない。一方最近知られるようになった江戸時代前期の史料には、狩野氏は関東から入部したと記されている（付編史料9）。関東の狩野氏とすれば小田原北条氏家臣に名前がみえるが〔埼玉県1986別冊〕、こちらも越中狩野氏と直接結びつく史料はない。

以下、飯久保城主狩野氏の動きを、上杉氏や織田氏とのかかわりの中でみていきたい。

越後の長尾景虎（上杉謙信）は、永禄3年（1560）以降数度にわたって越中に出陣しており、それは三つの時期に分けられる。

第1次は永禄3年から同5年にかけてのもので、これは同盟していた松倉城主椎名康胤の要請で、神保長職を攻撃したものである。長職は天文年間中頃に富山城を築城し、越中中部において勢力をのばしていたが、この攻撃で富山城から増山城へ落ち延び、さらに増山城からも一時逃亡する事態となった。付編史料2の狩野良政書状はこの永禄3年とされるもので、飯久保城主狩野氏の初出史料である。これによれば、この頃狩野氏は人質を差し出して長職に属していたが、沢川の田端氏に対して長職に同心すべきかどうか心底を問いかけている。

まもなく能登の畠山義綱の仲介により長職は所領を回復し、翌永禄4年には狩野宣久が光久寺に寺地などを寄進している（付編史料3・4）。

謙信の第2次越中出兵は、永禄11年（1568）春、椎名氏が上杉方から寝返り、武田氏・越中一向一揆と同盟したために、椎名氏の本拠地である松倉城を攻めたものである。松倉城は落城し、椎名康胤は砺波一向一揆に合流した。これにより謙信は越中東部を支配下におき、翌年魚津城に配下の河田長親を配置した。

一方この頃から神保家中は親上杉派と反上杉派に分裂し、元亀2年（1571）頃に長職が没した後は、神保氏の勢力は衰退してしまったようである。天正元年（1573）10月、河田長親に対して小島城鎮と狩野道州が連名で神保氏次郎の家督相続について書状を出しており（付編史料5）、狩野氏も上杉方に接近していたと思われる。

謙信の第3次越中出兵は、天正4年（1576）から翌5年かけての能登侵攻である。天正4年9月に謙信は一向一揆と和睦して能登へ侵攻し、翌5年9月に七尾城が落城した。この過程で越中・能登の国人は上杉配下へと組み入れられた。

しかし天正6年（1578）3月に上杉謙信は急死し、4月には織田信長が飛驒経由で神保長住と佐々長穂を越中に派遣した。

この情勢の急展開でいち早く織田方へ転換した国人のひとりが、守山城（高岡市）の神保氏張である。氏張は早くから織田方についていた能登の長連龍が、天正6年10月越中へ亡命してきたときに、連龍を守山城下の二上山金光院に寄寓させている。この時連龍は南条保久津呂城を経由しており（付編史料10）、また翌7年夏には狩野将監の媒酌で連龍と氏張妹とが婚姻した（付編史料14）。従って、氏張とともに狩野氏もいち早く織田方へ転じていたと考えられる。

また天正7・8年頃には、狩野親信が長連龍に仕えていた長次郎左衛門尉の扶持分を定めている（付編史料6）。

その後天正9年越中に入部した佐々成政の元での狩野氏の動向は、不明な点が多い。しかし天正13年（1585）7月、阿尾城主菊池右衛門入道に対し佐々成政方からの離反を勧説した前田利家書状に、狩野氏領について言及した箇所があるので（付編史料7）、狩野氏はおそらくこの頃まで飯久保に在城し、成政降伏後に越中を離れたものと推定される。

その後は宝永5年（1708）、江戸で浪人していた飯久保城主の子孫狩野九郎右衛門が、富山藩に仕官しているのが確認されている（付編史料12）。

これらの史料から、16世紀後半の飯久保城は一貫して国人狩野氏の居城であったと考えられ、天正9年頃と推定される飯久保城出入口改修は、織田方に属した狩野氏が、自らその居城を改修したものととらえたい。

さて、越中・能登・加賀地域における織豊系城郭としては、加賀白山山麓地域に築かれた一群と、加越国境周辺に築かれた一群が注目されている。白山山麓地域の城郭は、織田方と一向一揆勢との戦いや、その解体後の地域支配を目的としたものと考えられ、鳥越城（鳥越村）・舟岡山城（鶴来町）・岩倉城（小松市）などが代表例である〔鳥越村教委1979、南1996、佐伯1999〕。加越国境の城郭は、天正12・13年の佐々成政と前田利家の対立の中で、佐々方にによって改修された陣城と考えられており、一乗寺城（小矢部市）・松根城（小矢部市・金沢市）・荒山城（金沢市）などが代表例である〔宮本1994・1999、佐伯2000、石川県教委2002〕。

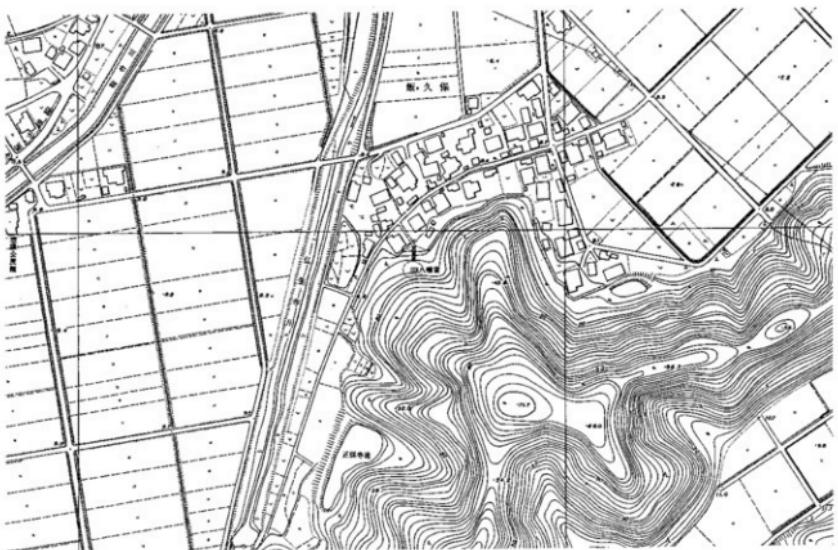
これら以外の織豊系城郭では、前田利家の居城である七尾城と狩野氏の飯久保城に加えて、海老瀬城（水見市）が知られる。海老瀬城の詳細は不明であるが、全体の縄張りが小振りなことから、一時的な陣城と考えられている〔水見市教委2001・水見市2002〕。

従て越中・能登・加賀における織豊系城郭は、新たに所領を得た部将の居城や、地域の軍事的緊張に伴う陣城がほとんどであり、飯久保城のように在地の国人がその居城の出入口を織豊系のものに改修したことは、きわめて珍しい例であったといえる。

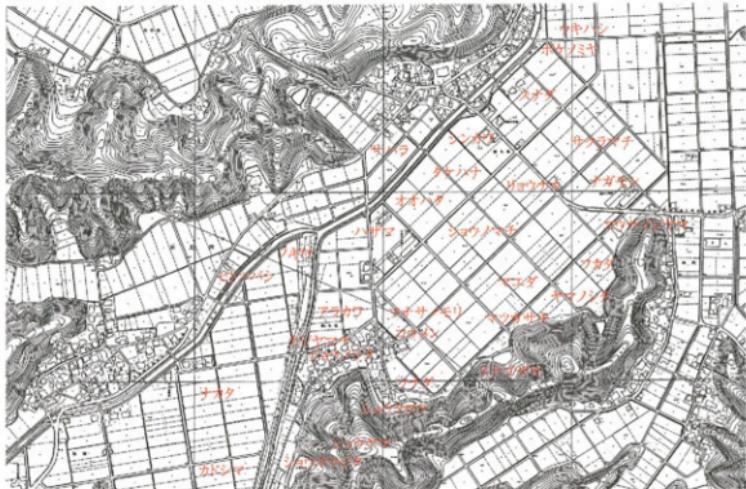
天正9年（1581）4月から8月にかけて、信長が派遣した奉行菅屋長頼によって、能登・越中では遊佐氏・寺崎氏・石黒氏といった国人が処理されるとともに、両国内の城が破却されたという〔「信長公記」近藤編1901〕。この破却については他に史料がなくその実態は不明であるが、東に強敵上杉氏をひかけた織田政権が、越中・能登国内の軍事的な整備・再編成を徹底しようとしていた意図が読み取れよう。そして七尾城や飯久保城の改修も、こうした破却の延長上にあるといえるのではないだろうか。飯久保城の改修は出入口のみにとどまり、石垣など織豊系城郭の他の要素はみられないが、重要な軍事情報であ



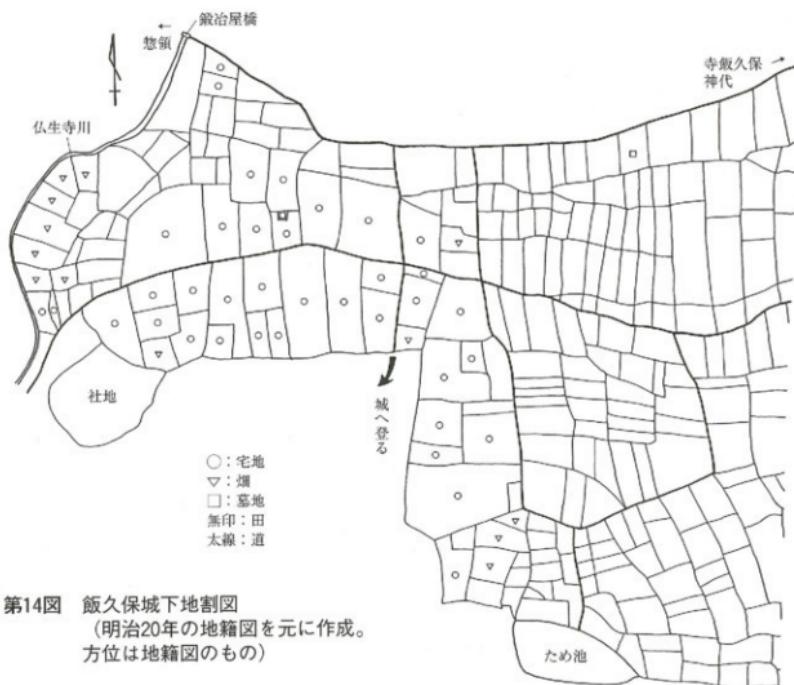
第11図 飯久保城とその周辺（昭和47年測量 1／5000）



第12図 飯久保城とその周辺（平成3年測量 1／5000）



第13図 飯久保城周辺の地名



第14図 飯久保城下地割図
(明治20年の地籍図を元に作成。
方位は地籍図のもの)

る繩張りの変更は、大きな意味をもつことである。あるいは狩野氏は織田政権とかかわる中で、近辺の他の国人とは違った役割を担っていたのであろうか。⁴⁴飯久保城の繩張りは、そうした一国人の動きを端的に示しているように思われる。

注

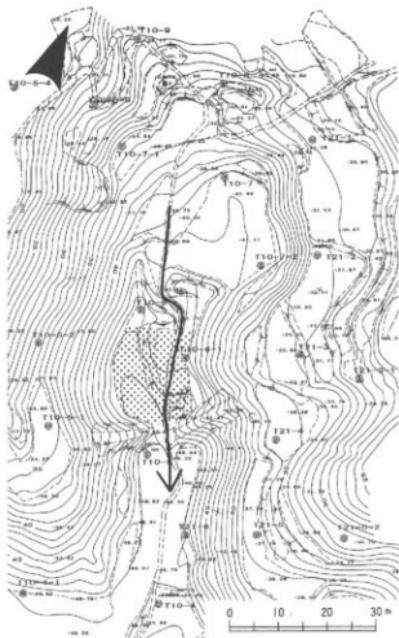
- 1 なお「ハレ」の地名は、布施地区では「晴」の字をあて、神代地区では「羽連」の字をあてている。また矢方の村名について児島氏は、この矢野氏の所領があったこと（矢野方）から変化したものではないかと推定している〔児島1962〕。
- 2 飯久保城出入口北側には南北約20mの平坦面があり、地形的には虎口空間をさらに広くとることも可能であったと考えられる。しかし七尾城と虎口空間の広さ（特に楔形と内側の出入口の距離）が等しいことは、そこに強い企画性があると思われる。飯久保城の出入口は、七尾城を直接のモデルとした可能性がある。
- 3 天正9年（1581）年以降、上杉景勝家臣に尼子浪人出身の狩野秀治（新助・讚岐守・彦伯）がおり、その子は狩野中務を名乗るが〔新潟県1984・1987〕、飯久保城主とは別人であろう。
- 4 天正10年（1582）6月本能寺で討死した信長の小姓衆の中に、狩野又九郎の名がある。又九郎はこの討死以外に記事がなく、出自も経歴も不明な人物である。信長の周辺には永徳をはじめとする狩野派絵師がいたが、この又九郎の出自の候補に、飯久保城主狩野氏も加えるべきであろう。



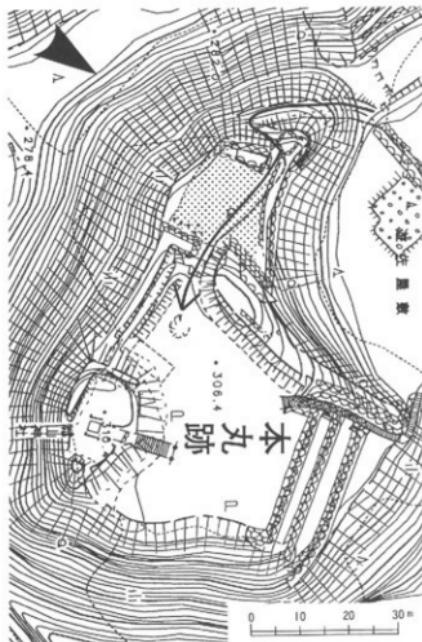
第15図 飯久保城の虎口空間（南から）



第16図 七尾城本丸の虎口空間（東から）



第17図 飯久保城の出入口（1/1000）
網点が虎口空間



第18図 七尾城本丸の出入口（1/1000）
網点が虎口空間
千田嘉博氏作成の図（七尾市2002）
を加筆・修正

おわりに

調査の成果を以下に要約する。

- 1 飯久保城は近世の絵図に場所が記されており、地元では古くから古城跡として認識されてきた。
- 2 飯久保城は中世南条保内に立地する。ここは十三谷地区の最奥部であるが、水運や街道によって周辺地域と容易に連絡できる場所である。
- 3 城下には比較的広い屋敷地の地割がうかがえ、その周囲は仏生寺川と深い水田によって自然の防衛となっていた。仏生寺川にかかる鍛冶屋橋のたもとには鍛冶屋町の地名が残っている。
- 4 城跡は標高75mの丘陵頂部を中心に、南北約300m、東西約200mの範囲であり、主郭部と平野との比高は約60mである。郭・土塁・堀切・堅壁・切岸などの施設があるが、石積・石垣は確認されなかつた。
- 5 上郭の発掘調査では整地層と考えられる面を検出し、区画溝の可能性がある遺構も確認された。
- 6 出土遺物には中世上飾器・越前・染付・茶臼・土鍤・石造物などがあり、16世紀後半主体のものと考えられる。
- 7 飯久保城出入口の縄張りは、織豊系城郭にみられるタイプのものである。この出入口は天正9年頃前田利家によって改修されたとされる七尾城本丸の出入口と同じ形態であり、しかも両者の虎口空間の大きさはほぼ同一である。
- 8 文獻史料によれば^{参考}16世紀後半の飯久保城は、国人狩野氏の居城であったと考えられ、狩野氏は天正6年の上杉謙信死後、いち早く織田方へと転じている。
- 9 飯久保城は、天正9年頃狩野氏によって出入口が織豊系のものに改修されたと推定される。越中・能登近辺で織田政権に属した在地国人が、その居城を織豊系城郭の縄張りに改修した例は珍しく、狩野氏と織田政権とのかかわりが注目される。

二年間にわたった飯久保城跡の調査はひとまず終了した。調査前は倒木や笹竹などによって道や視界がふさがれ、荒廃した状況にあったが、地元の人々の協力もあって片づけが進み、主要部については見学が容易となった。

しかし築城の時期、光久寺をはじめとする寺院との関係、周囲に散在する中世石造物との関連など、残された課題も多い。

こうした課題も含めて、今後の保存・活用に向けて、地元との連携を深めながら取り組んでいきたい。

飯久保城関連年表 (数字は付録史料の番号)

- 1560 永禄3年 3月、長尾景虎（上杉謙信）が越中に攻め入り、神保長職の富山城・増山城・守山城を攻略する。この頃、狩野中務丞良政は神保方に人質を差し出していた（2）。
- 1561 永禄4年 4月、狩野宣久が光久寺に寺地などを寄進する（3・4）。
- 1562 永禄5年 飯久保地内に狩野中務を開山として、繁久寺（飯久寺）が創建されたと伝えられる。同寺は近世初め頃に海老坂に移転か。
- 1573 天正元年 10月、小鳴六郎左衛門尉職鎮と狩野右京入道道州が、上杉謙信の部将河田長親に連署状を送り、謙信が神保民部大夫の跡職を弥次郎に充てたことについて感謝の意を述べる（5）。
- 1574 天正2年 繁久寺（飯久寺）から分かれて、飯久保地内に光西寺創建と伝えられる。
- 1576 天正4年 9月、上杉謙信が越中へ攻め入り、湯山城などを攻撃する。
- 1577 天正5年 9月、七尾城落城、上杉謙信越中・能登を制圧する。
- 1578 天正6年 3月、上杉謙信死去。
4月、織田信長が、神保長住と佐々長穂を越中へ派遣する。
10月、長連龍、越中へ亡命し、神保氏張の庇護を受ける。
- 1579 天正7年 この頃、狩野中務丞親信が長次郎左衛門尉の扶持分を定める（6）。
夏頃、長連龍が狩野將監の媒酌により神保氏張の妹を娶る（14）。
- 1581 天正9年 2月頃、佐々成政に越中が与えられる。
3月、織田信長の奉行として菅屋長頼が能登へ派遣される。長頼は能登・越中の城を破却し、8月に安土へ戻る。
8月頃、織田信長が前田利家に能登を与え、利家は七尾城に入る。
この頃、飯久保城の出入口改修か。
- 1582 天正10年 6月、本能寺の変で織田信長死去。
- 1585 天正13年 7月、前田利家が菊池右衛門入道に対して出した勧誘の条件の中に、狩野氏領のこと記される（7）。
- 8月、佐々成政が羽柴秀吉に降伏する。
- 1646 正保3年 前田利常により繁久寺が前田利長墓所の南に移される。
- 1648 慶安元年 光西寺が長坂村へ移る。
- 1708 宝永5年 江戸で浪人していた飯久保城主の子孫狩野九郎右衛門が、富山藩に仕官する（12）。

参考文献

- 石川県教育委員会 2002 『石川県中世城館跡調査報告書Ⅰ』
- 石川県図書館協会 1972 『長氏文献集』
- 石川県図書館協会 1974 『加越能寺社由来』上巻
- 井口村 1992 『井口村史』下巻
- 上田秀夫 1982 「根来寺出土の染付について」『貿易陶磁研究』No.2
- 小野正敏 1982 「15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2
- 久保尚文 1983 『越中中世史の研究』 桂書房
- 光西寺 1985 『東施山光西寺誌』
- 児島清文 1962 『氷見市地名考』
- 近藤瓶城編 1901 『改定史籍集覽』第十九冊
- 埴玉県 1986 『新編埴玉県史』史資料編8 中世4
- 佐伯哲也 1992 「神保氏の重要な拠点(2)」「越中の中世城郭」第2号
- 佐伯哲也 1999 「白山山麓における織豊系城郭について」『北陸の考古学Ⅲ(石川考古学研究会誌第42号)』
- 佐伯哲也 2000 「天正十二・三年における前田・佐々木氏の攻防」『石川考古学研究会誌』第43号
- 佐伯哲也 2001 「長連龍の城郭について」『能登半島の考古学(石川考古学研究会誌第44号)』
- 千田嘉博 2000 『織豊系城郭の形成』東京大学出版会
- 高岡徹 1990 「氷見南部地域における中世山城とその性格」『富山市日本海文化研究所紀要』第四号
- 谷口克弘 1995 「織田信長臣人名辞典」吉川弘文館
- 富山県 1975 『富山県史』史料編II中世
- 富山県 1984 『富山県史』通史編II中世
- 鳥越村教育委員会 1979 『鳥越城跡発掘調査概報』
- 中山有志 1956 「氷見平野における条里遺制」「越中史鑑」第9号
- 七尾市 2001 『新修七尾市史』3 武士編
- 七尾市教育委員会 1992 『七尾城跡シッケ地区遺跡発掘調査報告書』
- 七尾市教育委員会 1996 『七尾市内遺跡発掘調査報告書』
- 七尾市教育委員会 2002 『史跡七尾城跡保存管理計画書』
- 新潟県 1984 『新潟県史』資料編5 中世三
- 新潟県 1987 『新潟県史』別編3 人物編
- 新田二郎編 1988 『富山藩主由緒書』越中資料集成2 桂書房
- 氷見市 1998 『氷見市史』3 資料編一 古代・中世・近世(一)
- 氷見市 2002 『氷見市史』7 資料編五 考古
- 氷見市 2003 『氷見市史』4 資料編二 近世(二)
- 氷見市教育委員会 1985 『富山県氷見市戸葉節中世墓発掘調査報告書』
- 氷見市教育委員会 1992 『氷見バイパス関連遺跡調査報告1』
- 氷見市教育委員会 1993 『県指定史跡阿尾城跡』
- 氷見市教育委員会 2000 a 『森寺城跡』
- 氷見市教育委員会 2000 b 『脇方谷内出中世墓』

- 水見市教育委員会 2000c 『柳田布尾山古墳 第1次・第2次発掘調査の成果』
- 水見市教育委員会 2001 『水見の山城』
- 水見高校歴史クラブ 1961 『故郷の城址』
- 水見市十三公民館 1995 『十三地区の地名』
- 水見市立博物館 1999 『戦国・水見』
- 福井県教育委員会 1987 『福井県の中・近世城館跡』
- 布勢尋常高等小学校 1936 『富山縣水見郡布勢村誌』
- 南龍雄 1996 『三坂越と津上川流域の城塞群について』
- 宮田進一 1997 『越中国における土師器の編年』『中・近世の北陸』桂書房
- 宮本哲郎 1994 『金沢市荒山城跡』『石川考古学研究会々誌』第37号
- 宮本哲郎 1999 『北加賀にある城館跡の概観』『北陸の考古学Ⅲ』(石川考古学研究会々誌第42号)』

付編 飯久保城関係史料

史料一 政所賦銘引付

文明九年条（親元日記）

越中国射水郡南条保内針江村事女子相伝云々、依難叶在陣、土肥

十郎仁永代沽却之旨、可被成奉書之由申候、

非申状之間、不能加銘、清泉州被執申之条、以書状返事、六月

廿九日申遣畢、

被成奉書畢、

史料二 狩野良政書状（田畠文書）

憲令啓候、仍今度者守山

自落、不成就仕合無念候、

然者其刻之林次兵無同心

事、併自拙夫申越候付、

先々取合手段可然候、乍去

偏長職様へ御身方之様、と

山より相聞候、これも人

質故与令分別候、此表於

行者、貴所とりあつかいをもて

同心候様ニ可有馳走候哉、其

上にて無同心者、貴所其外

名中被相談、土倉共二

史料四 狩野宣久寄進状（光久寺文書）

今度依馳走、於□□者、□□

申越候間、おんみつをもて御
心底之旨可承候、於其上拙夫

思安之通重而可申入候、

委曲之事、御報可承候、

恐々謹言

狩野中務丞

四月廿日 良政（花押）

さわこ

田端殿

御貴所

史料三 狩野宣久山地寄進状（光久寺文書）

御太子江寄進山之覺

一、西者たち之小坂より

丸山之嶺てら境

きり、東者の場

之星ためより

ほりきり迄、末代

令寄進者也

水禄四年卯月五日 宣（花押）

光久寺

之所、末代令寄進候、并門前
家役於何事も皆免、末代

令用捨者也、如件

光久寺 永禄四年卯月五日 宣（花押）

まいる

史料七 前田利家書状

覺

為御堪忍、貳百五十俵申談候、世上一途之上二御望之地可
申定候、少も不可存如在候。恐々謹言。

正月廿七日 狩野中務丞 親信判

長次郎左衛門尉殿 参御宿所

史料五 狩野道州・小島職鎮連署書状（上杉家文書）

「天正元年十月十一日」

狩野右京入道

小島六郎左衛門尉

河田豊前守殿

參御陣處

道州

職鎮

」

神保民部大夫跡職之儀、弥次郎
被仰付、忝存候、自今以後、
上様御前一筋奉守、走廻候
様二意見可仕候、弥御取成
可為恐懼候、恐々謹言

小島六郎左衛門尉

職鎮（花押）

狩野右京入道
道州（花押）

拾月十一日

史料六 狩野親信書状写（越中志徵）

河田豊前守殿
參御陣處

一、其國越後へしたかへ候時の本知を、藏介・神安手
まへニとり入候由、尤之存分候、本意此節候事、
一、当郡の内相浦と申所、狩野など相違有間敷候事、
一、石動の下、うなミをきりニ、可進候事、
一、朝日山の下川きりニ、かたをほうしお、右の相浦
くつろをさかい、上庄可進候、殊一万石まで有まし
きの由候、弥相違有ましく候事、

一、五位庄事ハ、治部左衛門かたより懇ニ可申候事、

一、其國無事ニ成候ハん由、中ノ無給事ニ候ヘ共、万二

和睦ニ成候は、其方本知ほど進之、我等かへ可申候事、

一、其方行歩かなはざるニ付て、二人の息陣參被調、

一、その国一篇ニ申付候ハ、要書無相違様ニとの事、

心得申候事、

一、賀州よりあき人つけ、言申の由、其覺悟可仕候事、

一、湯山の事、才覺專一候、如書付、則彼かたへ状を遣候、其

方々被遣可給候、首尾被相分尤候、せんのせんと申ハ

此所之事、

一、此儀おんミつ可仕事、心得申候、專ニ二て候事、

右、いつれも相違有ましく候、追而せいしの筆もど

ミセニ、たしかなる人を可給候、直談にもくハレしく申度候、

委細ハ治部左衛門かたより可被申候 以上

七月四日 安右入

賀又利家（花押）

まいる

史料八 鞍骨村検地打渡状（藤井家文書）

水見郡内くらほね村

一、参拾五町七段半四拾步 田方屋敷共

一、壱町六反大三十歩

畠かた

合三拾七町四段小拾步

此内五段小荒分

横関喜左衛門（花押）

万治元年一月三日

水見庄飯久保村
八郎兵衛（印）

与四右衛門（印）

与助（印）

右此外江・道・川引捨如此者也

姉崎四良左衛門（花押）
内田清三郎（花押）

天正十三九月十九日

南条保くらほね村

谷弥左衛門（花押）

御百姓中

史料九 在所の古山城御尋につき申上書（小林家文書）

御尋ニ付而申上候

一 私共在所ニ御座候古山城、百年余以

前ニ、野鹿中務殿と申御城主、関東古

御越被成、右之山城御拵、拾力年余

御居城被成、其後又関東江御本意

被成候之由承及申候、其跡江刑信と申

仁のりこミ被申候處ニ、能登侍衆御越

被成、刑信をはせめおとし被成候由承及

申候、今程ハ畠ニ仕置申候

一本丸長三拾間、は、拾間ほと御座候

一下タ本丸迄道のり百四拾間程御座候

一 下タ城之高拾丈余御座候、だんく
数多御座候、以上

史料十 古老紀談

阿蘇陀院より案内を以、越中郷四十八林御通り、木戸がくまより狩野の浜へ御出、ぐんないの内なんぢやう村くづれ三郎左衛門と申人のあき城へ御入候て、うちはるへ御内談、御見次頼申との御事に候。

史料十一 越登賀三州志故墟考卷之一

飯久保 在南條保飯久保村領。本丸東西三十五間南北十三間。築より本丸まで二町。今は柴山となれり。茲に南條・氷見・岩崎・磯部の故跡あり。景周接。南條は南條城主加納申務と云ひ、又小浦石見

南條城に據るとあれば、此の飯久保城即ち南條ならん。飯久保及び氷見の南村、皆南條保内也。又氷見城とは、一書に天正三年六月二

十四日神保氏春の城を攻むとあり。長家記には、天正六年長連龍水見城主堀江彌八郎（一作四郎兵衛）を攻め、十一月陥城とあり。可

考。若し又武家混月集に、天正十年氷見は菊池子六郎居城と云ひ、國事昌披問答に天正十四年瑞龍公守山へ入城の時、氷見城へ菊池伊豆を入れ置くと云ふを以て見れば、氷見城とは阿尾城の一名のやうなれども、故城記に氷見・阿尾・岩崎の三城を分出し、且氷見城は

氷見の西、狩野中務居すとあれば、是亦此の飯久保のことか。飯久保即ち氷見の西南の間に當る。阿尾は氷見より道は僅かなれども、氷見の北に當る也。又岩崎とは、一書に岩崎城之を氷見城とも磯邊城とも名づくと云へり。是等の事景周一々之を正すに、氷見町續には阿尾の外に遺跡なし。然れば畢竟南條・氷見・岩崎・磯部・皆飯久保城の別名なるべし。但し磯部の名は、氷見より西二里に今磯部村あれども、遺跡此の村領に見えず。

相傳ふ、狩野中務築き、按、狩野中務舊史に所見なし。太平記

に越中住人氏家中務重國、越前足羽にて新田義貞の首を取るとあり。

若しくは此の中務に非ざるか。又狩野は加納にて、中務加納の郷士か。高岡の繁久寺は、永禄五年中務射水郡南條に建立し、其の後高岡へ移すと云へり。

史料十二 富山藩士由緒書（富山県立図書館）

一 高祖父 狩野九郎右衛門
右先祖者、越中国氷見飯久保両城主狩野中務末胤之由ニ而、江戸表住居浪人罷在候処、安祥院様御代、宝永五年二月、六人扶持被下之、御徒組被召抱、御次詰被仰付候

太龍院様御代、直ニ御次詰被、仰付候

享保十二未七月、御扶持方御引直、三拾俵被下之候、同十四酉正月、御組替与外組被仰出、富山表江引

越被仰付候

同十九寅正月、及老年候ニ付隠居被仰付候

史料十三 越中志徵

○飯久保城跡 一書に云。昔加納中務と云人、飯久保・惣領・佛生寺・鞍骨四ヶ村を所領し居城を飯久保に構へ、爰に居住す。則于今城跡有之。又飯久保に馬場・馬場跡とて今田地とす。○貞享二年高岡繁久寺由来書に、永祿五年射水郡南條之城主加納中務發起にて建立。則南條に在寺の由申傳とあり。南條は則飯久保なり。○寶永元年舊蹟調書に、飯久保村領城跡。百廿ヶ年前鹿野中務と申者致居住由申傳候。本丸三十五間程、南北十一間程有之、麓より本丸迄二町程有之、唯今は柴山に成居申とあり。○故墟考に、飯久保城址。在南條保飯久保村領。本丸三十五間、南北十三間。麓より本丸まで二町。今は柴山となれり。茲に南條・氷見・岩崎・磯部の故跡號あり。景周按するに、南條は南條城主加納中務と云い、又小浦石見南條城に據るとあれば、此飯久保城即南條ならん。云々。相傳。狩野中務築くと。○按するに、狩野中務史に所見なし。太平記に、越中の住人氏家中務重國、越前足羽にて新出義貞の首を取とあり。若しくは此中務に非ざるか。又狩野は加納にて、中務加納の郷士か。高岡繁久寺は、永祿五年中務射水郡南條に建立し、其後高岡へ移すと云へり。又小浦石見守一守據れりと。石見は畠山氏の族也。神保氏春に属し軍功あり。後に謙信に属す。天正十一年又佐々成政に属し、三善石見守と改む。同十二年加州に來る。此子松原内匠瑞龍公に笠仕し、三百石を賜ふと。○今按するに、加納中務は、繁久寺の寺記に據れば、永祿の頃の人にて、太平記の氏家中務ならんかと云は、非也。

史料十四 長家譜 第三卷

其後御東髪被成、九郎左衛門好連公後被改連龍公。与御改。神保安芸守氏治号新殿。与御婚姻被成候。

媒酌は神保氏旗下越中南條狩野將監也。(下略)

史料十五 飯久保城の巻

「富山縣氷見郡布勢村誌」富山縣氷見郡布勢尋常高等小學校編 昭和十一年刊

○位置：布勢字飯久保にあり。今は柴山にして昔の跡を留めざるもの山薦の民家一小村をなし城飯久保と称す。

○城主：戦国争乱の世、天正年間、狩野中務宣久の築く所と傳ふ。天正三年神保氏春之を攻め陥し、後小浦石見守一守之に據れりと傳ふ。

○城の構造：勿論城壁壞滅せし今日、その規模構造等は知る由もなきも城跡より察するに本丸は東西三十六間餘、南北十九間餘の大きさと察せらる。明治時代までは建物の礎石散在しその構造を窺ふに便なりしが後時代開墾するに際し全部除去せるため、今日は全くそのまま手掛け失ひしと土地の古老は語れり。城跡の裏は急坂にて一目十三谷平野より氷見町を眺望し得る要害の地を占め、前面附近の山と相通する所には切り削て掘り城の側には高き土堤を築けり。

○城の飲料水：城趾より二三間離つた所に一年中かれぬ水の湧出する所あり。今より考るに多分城の戰時に於ける飲料水として使用したるものならんと思はる。

○城下町：現在の城飯久保部落は旧の飯久保城の城下町にして、鍛治屋町、ゴゼ町、正保寺等の地名の今に存するは蓋しその頃よりの

ものならん。鍛治屋町に架せられし鍛治屋橋は今も尚ほ存し、その附近には周囲一丈餘の老松あり、樹幹には大空洞ありて子供等の入り遊べる程なりしが約十五年以前枯死せり。村人等はその跡を掘りて杉を植えし時人骨の多数出でたるより見れば、或は戦乱の代の塚ならんといへり。

○飯久保城の事に關連した事：

浮橋・飯久保には浮橋といふ姓が多いがそれは次のやうなことより來てゐるものと思はる。飯久保より神代に通ずる道路の附近を浮橋といひ昔は大変深い田なりしが以前にはそこに橋が架せられ飯久保城攻略の時にはその橋を切り落し人馬の進撃を阻止せる所と思はる。

舟中・城飯久保と神代との境界をなす丘陵の下、田圃の中に舟中と称する小さき森あり。昔飯久保城主の舟を繫留せる所の跡なりと称せらる。附近一面の田地となり後も舟中は甚だ深き沼田にて其所に落ち込めば再び這い上る得ずして死したりと傳ふ。現在にありては土を埋め立派なる田と化せり。

ほけの森・飯久保と深原との境界に近き飯久保の田地中に小さき森の残れるあり。世人称してほけの森といふ。昔、飯久保城の神保氏春に（或は上杉謙信ともいふ）攻め落されし時、飯久保城主の一族郎党の討死して果てし地なりと称さる。今はその地に一尺二三寸のクルミの樹あり以前にはほけの花の真紅に燃えて咲き甚だ美麗なりきと。里人傳へて言ふ、そのほけの花を折る時は直ちに狂人にならべしと。故に誰もそのたゞりを恐れ手を觸るゝものなし。

城下町の旧家：

八幡 現在の戸主を宮下一太郎と称す。飯久保城繁盛の頃よりの

旧家にしてその家には城主所有せしことある梅瓶を傳へたるも中頃に至り他に譲渡せりと。

正保家 八幡と共に正しき旧家なり。明治の頃までは草高七八十石を所有し昔の有様を保持し居たりしと。

○昔の水見往来：

昔の水見往来のことはあまり飯久保城の事と関係してゐないやうに思はれます。特別に書く格好の章もないやうに思はれますから此所に綴ることにします。

然し、水見町が現今のように水見郡の中心地たるまでに発達してゐなかつた時代に、いやそれよりも水見町のまだ生成してゐなかつた時代に水見郡内に市街地を形成してゐたのは我が村の城飯久保でありました。昔は、市街生成の要素としては交通や産業などの点よりも城下であることが第一の要素であつたのです。そして城下であることによつて交通も産業もそこに中心を求めるものです。故に水見往来の中心地も現在のやうに水見町を中心としたものではなく、城飯久保を中心としてゐた時代のあることを考へて見る時に、此所で水見往来の昔に就いて述べても無意義でないと思ふのであります。

十三谷の水見往来は佛生寺から城飯久保に渡り、城下の町にかづてゐた鍛治屋橋、道田橋を通つて神代村の矢方に至り晴橋を通つて大浦、金浦を過ぎて窪村、水見町といふ順であります。晴橋は現在は布施から大浦に達する道の中程の所矢方川が海津に流れる上に架せらる、極めて小さく粗末な橋であります。過去には橋も大きく立派な欄干のついてゐたもので水見郡内では多く見ることの出来ぬものであつたと申します。こゝで先づ不思議になつて来るのは晴橋の大きさです立派であつたとか粗末であつたとかは昔の人の言葉を

そのまゝ信ずればよいのですが、現在あの小さな矢方川に何故に大きな橋を架けねはならなかつたのでせうか。その事を考へる時に今矢方川は昔は相當大きな川であつたらうと思はれるのです。勿論布勢湖が埋没して後のことです。

今の矢方川はその源は神代部落、蒲田部落より發する溪流であるが、かゝる谷浅き所の渓流では決して昔日の大をなすことは出来ません。察するに今日の佛生寺川の源をなす佛生寺村脇の谷内、大窪、

大覚口を流れて布勢村城飯久保に入る流れが、今日城飯久保内を溝のやうに残つてゐる所を流れて矢方川に注いでゐたものではあるまいかと考へられるのであります。そして對岸の佛生寺川は吉池、上中の地に源を發し鞍骨川の支流を合して今日の流路をとつてゐたものでせう。

矢方川の源が城飯久保を通つて佛生寺村脇の谷内の方面に延びてゐたであらうと考へるのは、今日地図を拡げ実地に就いて見ての上の考究ではありますが、もう一つ以上の通りであれば都合のよい事があります。それは飯久保城として防禦上非常に優勝の地たらしむることであります。若しこの川を堰き止めて城下一面に河水を氾濫させる時は、地は布勢湖の埋没した深き深き沼田であり容易に徒步では攻略出来ぬ所となるからであります。多分築城に際してはかかる計畫は十分にめぐらしてあつたことと信ぜらるゝのであります。次には運輸の便のよい事です。昔の道路の悪かつた時代には河川は大切な運輸機関でありましたから大抵城下を河川が通つてゐたでせう。今日城下を見ましても市街内であつたと思はれる所に橋の必要を認めませぬが、昔数々の橋の架せられてあつたことを聞けばは尙更その感を強くするのであります。先に述べた舟中といふ舟の繋場な

どの事も考へられるのであります。そのやうにして流れてゐたものが後世、洪水のためにその流路を変更するに至つたか、或は城陥ちて虫の声のするに至りその川の重要性を認めず耕地を増加する関係上人工的にその水を今日の如く佛生寺川に吐かしめたものではあるまいかと思ふのであります。

○飯久保城に関する旧記

(三州志の該当部分の転載のため略)

図版



(1) 飯久保城跡遠景（東から）



(2) 飯久保城跡全景（北から）



(1) 飯久保城跡出入口（北から・樹形を外側からみる）



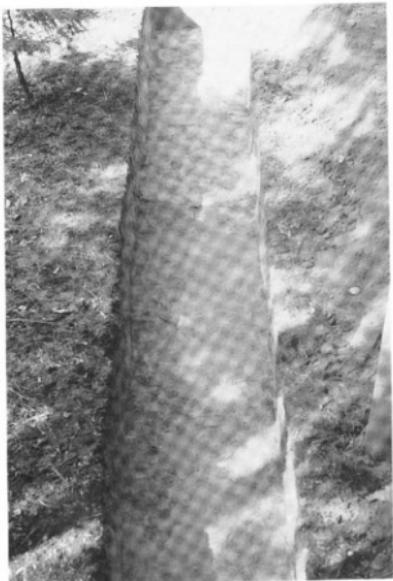
(2) 飯久保城跡出入口（東から・虎口空間から樹形内側をみる）



(1) 飯久保城跡出入口（北から・樹形の土壘）



(2) I トレンチと土壘（北から）



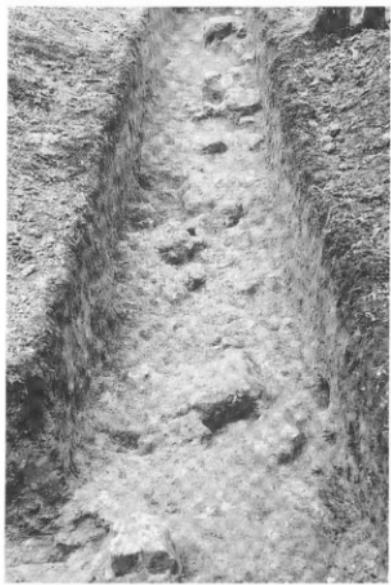
(3) I トレンチ全景（南から）



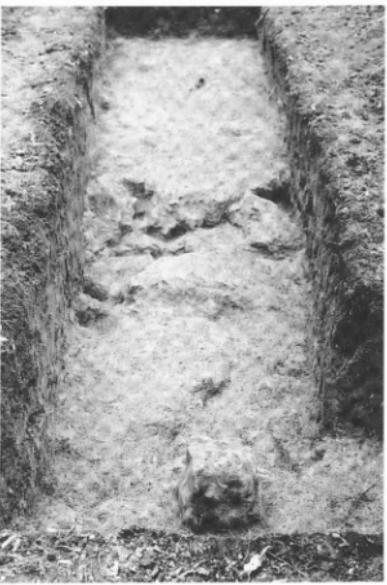
(1) II トレンチ全景（東から）



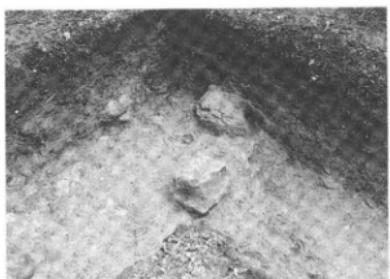
(2) II トレンチ拡張地区（北から）



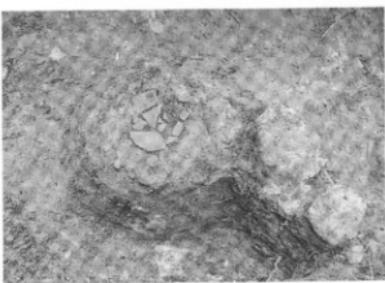
(3) III トレンチ全景（南から）



(4) III トレンチ全景（東から）



(1) 遺物出土状況（IIIトレンチ）



(2) 遺物出土状況（IIIトレンチ）



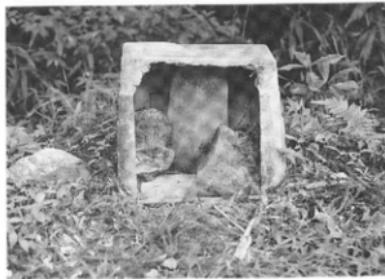
(3) 調査風景（調査区設定）



(4) 調査風景（発掘作業）



(5) 調査風景（埋め戻し作業）



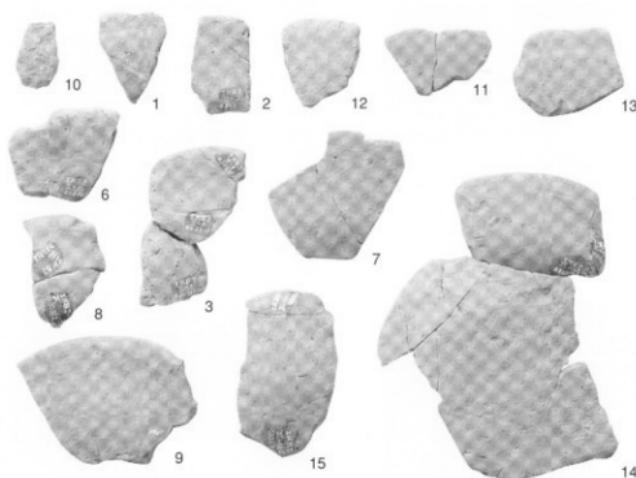
(6) A地点の石造物



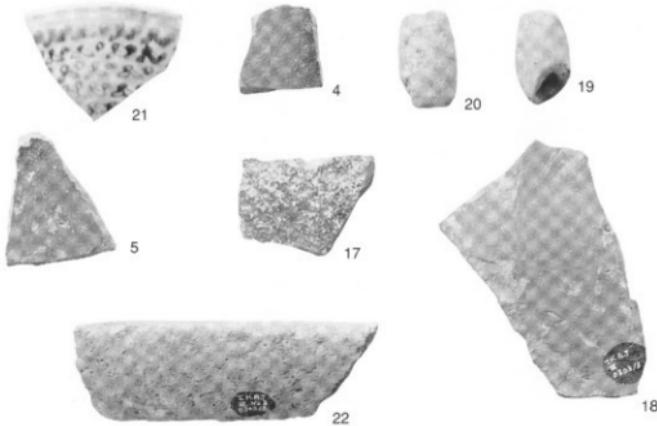
(7) IIトレンチ（埋め戻し後）



(8) IIIトレンチ（埋め戻し後）



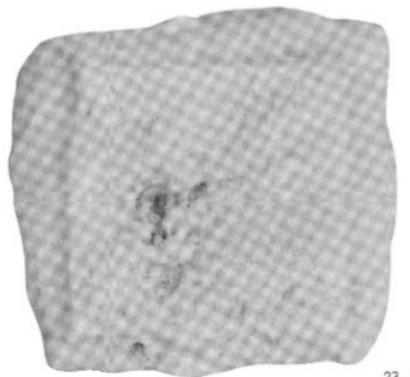
(1) 出土遺物その1



(2) 出土遺物その2



(1) 出土遺物その 3



底面

(2) 出土遺物その 4

報告書抄録

ふりがな	いいくほじょうせき					
書名	飯久保城跡					
副書名						
卷次						
シリーズ名	氷見市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第38冊					
編著者名	大野 究					
編集機関	氷見市教育委員会					
所在地	〒935-0016 富山県氷見市本町4番9号 TEL0766(74)8215					
発行年月日	2003年3月31日					
所収遺跡名	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
飯久保城跡	富山県 氷見市 飯久保	16202075	36° 136° 48' 57' 00" 30"	20011001 ↓ 20020331 20021001 ↓ 20030313	50m ²	範囲確認 (測量調査の 補足調査)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
飯久保城跡	城館	室町 安土桃山	溝	土師器 越前 茶臼 石造物など	織豊系の出入口をもつ	

平成15年3月30日 印刷
平成15年3月31日 発行

氷見市埋蔵文化財調査報告第38冊

飯久保城跡

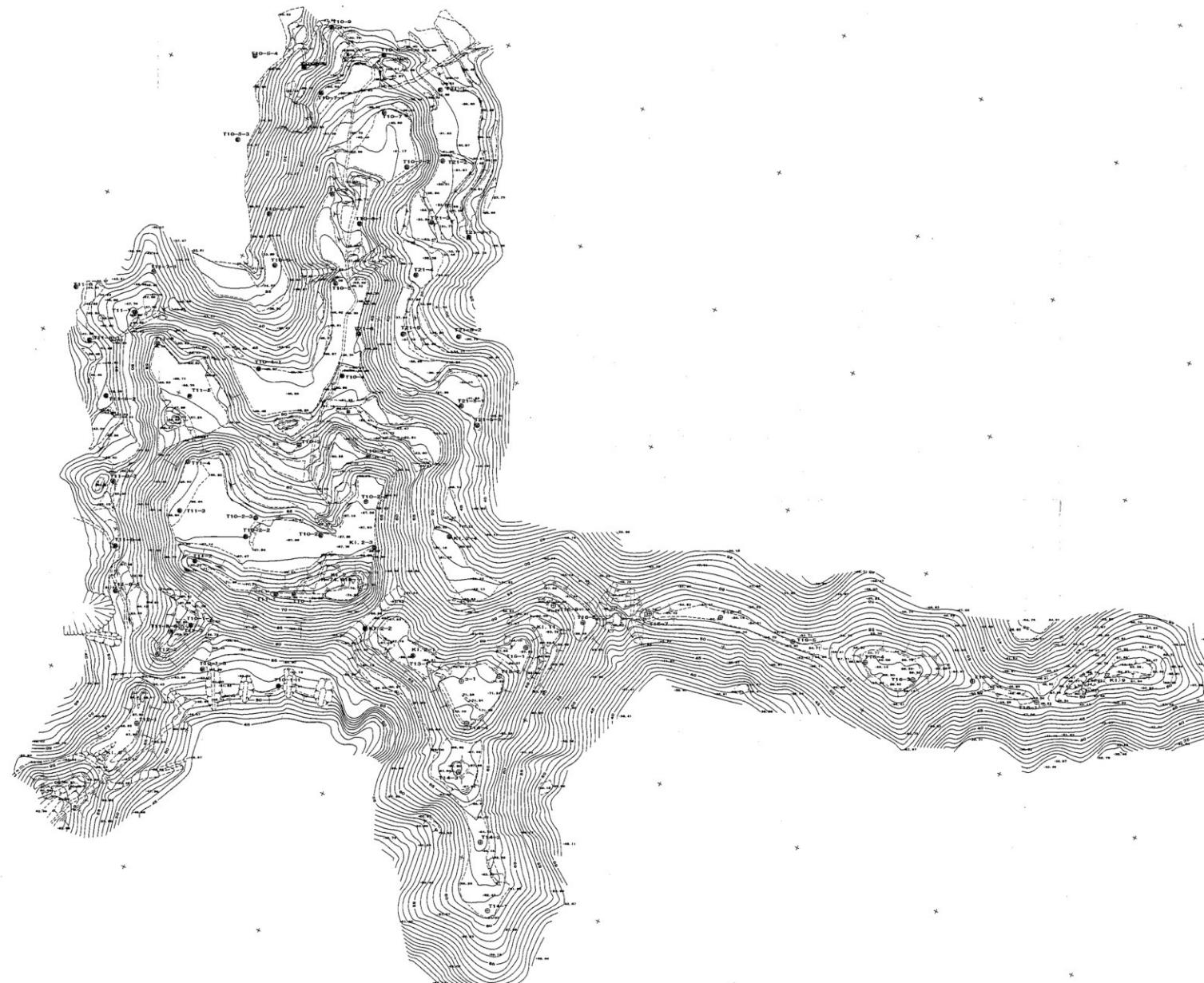
編集・発行／氷見市教育委員会

〒935-0016

富山県氷見市本町4番9号

TEL0766-74-8215

印 刷／北日本印刷株式会社



飯久保城跡平面図
縮尺 1 : 1000